
太陽は墮天使を照らして

治部醤油

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

太陽は墮天使を照らして

【NZコード】

N2278E

【作者名】

治部醤油

【あらすじ】

国内トップの魔法学校である「魔法大学附属高校」に入学した主人公、天城伊織。てんじょういおり 魔法学校の生徒でありながら、魔法を決して他人に使わない伊織は入学早々変わり者扱いされていた。一方、伊織の同級生であり、かつてこの学園で「太陽王」と呼ばれた優秀な兄に憧れる高宮陽菜は、他の生徒たちと同じく騒がしい新学期を送っていた。そんな2人は、入学早々学園を揺るがす大事件に巻き込まれていく・・・・・

プロローグ 暁の別れ

東の空にさし始めた薄い光が、夜明けの近い事を告げている。そして夜明けの光は、街灯の白い光と相まって小さな星明りを消し、夜空を無味乾燥の漆黒に変えていた。黒塗りの空の下、涼しさを通り越して寒さをはらんだ夜風が、レンガ造りの建物や手入れされた生垣の間をすり抜けていく。

辺りにはいくつかの家が立ち並んでいた。この辺りの家は例外なく、1階建てでありながらその幅の広さで面積を稼いでいるものか、センス良くデザインされた3階建てくらいの小さな屋敷かのいずれかである。

もちろん、この一帯には中流階級の人々が住むような家、例えば隣の家との1メートルも無いような隙間を無愛想なコンクリート塀で仕切り、お互いに土地の境界線を主張するような浅ましい家は存在しない。どの家も例外なく、垣根やレンガ造りの塀で周囲を軽く仕切るのみであり、しかもそれらに囲まれた敷地は、家だけを置くには広すぎるため、それぞれに詫び寂を感じさせる日本庭園やら美しい花の咲き乱れる西洋庭園やらがある。

そんなハイソな住まいが集まる、高級住宅地の一角。だが今夜はそこにおよそこの辺りの雰囲気とは似ても似つかない、異様な光景があった。

問題の場所は、町の東側に面した一角にある白塗りの壁も眩しい3階建てのお屋敷。イギリス式の生垣で囲われた敷地には、庭や噴水が並ぶ。いや、「並んでいた」と言つべきだろう。なぜなら・・・・・

その屋敷が、今や瓦礫と成り果てていたからだ。

もはや廃墟と言つべきその白壁の屋敷は、2階の床から上がりすべて吹き飛んでいる。コンクリートの壁は中の太い鉄筋ごと吹き飛び、その中に家具の欠片である木つ端や、洋服の切れ端が混じつて、いくつかの山をなしている。それらは庭にも散乱し、花壇の花は吹き飛んできたテレビの天板で潰され、彫刻の施された噴水の噴き出しは屋根の巨大な欠片でグニャリと折れて、途中から水をあらぬ方向に噴き出していた。土ぼこりと白い煙が、辺りを白く霞ませている。

そんな虚しい廃墟と化した瓦礫の中には、2人の人影があつた。

1人は、まだ原形を留めている屋敷の1階部分の上に立つていて、夜風にはためきながらその全身にまとわりついているマントのよつたスミレ色の布。襟にかかりかけたオールバッグの髪と氷のように酷薄な顔。男の周りには不可視の恐怖がまとわり付き、それが周囲に撒き散ら

されている。

そんな男は、薄ら寒い笑顔でなにかを見ている。しかもその笑顔は嘲笑や失笑などではない。人が心の底から何かを楽しむ時の、喜びとうれしさに満ちた、本当の笑顔である。

その笑顔の先は、もともと庭の花壇だつた場所である。瓦礫と砂埃に覆われたそこには、服を乱し、息を切らし、汗を噴出しながらも鋭い眼光を見せる、1人の少年がいた。

苦しそうな呼吸と共に肩を上下させ、埃っぽい周りの空気を吸い込んでは、また吐き出す。真つ赤に火照り、汗に濡れたその顔に、砂埃がまとわりついていく。そんな不快な状況にあつてなお、少年はその眼差しを上げ、数十メートルを挟んで対峙した男の方を睨みつけていた。

「それで？」

満足そうな笑顔をそのままに、男は少年に言葉を向ける。少年の眼光は、普通の人間ならば声はあるが、呼吸さえ止めてしまいそうなほどに鋭く、冷たい。そんな視線に対し、笑顔を見せ、平然と言葉を返す男の殺氣もまた、想像を絶する恐ろしさをはらんでいる。

「私を殺すのは、もう諦めたか？」

少年が最初に見せたのは、男の言葉への返答ではなかつた。その唇が震えるように動かされ、ボソボソと何かを呴いている。そこから発せられる声は、男に到底届かないほど小さな声。けれどその声に呼応するよう、元気が起きていた。

そして、少年の声が終わりに近づくと共にその変化が明らかとなる。唇を止めた後、ゆっくりと右手を田の前の空間に突き出す少年。その右腕の周りに、霧のような白い気体が集まっている。やがて、その白い気体は少年の拳を中心として棒状に集まりはじめ、同時に粘土細工のように姿を変えしていく。ゆっくりと形を変え、やがて完全な実体として少年の手に握られていた。

見た目から推理すると、紫水晶でできた槍、と言つたものである。先端の巨大な刃から、2メートルを越えている柄、その先端から最後尾に至るまで、全てが均一の素材でできていた。透明感と光沢が感じられるその物質は、うつすらと紫色を帯びている。

だが、少年の手に生まれた凶器を見てもなお男の笑みは変わらない。それどころか、その口元をいつそう吊り上げ、あたかも愉快な見世物を見るような表情で少年を眺めていた。

「その気は無い、か？」

心底嬉しそうな口調で、男は少年に念押しした。2度目の問い合わせに、今度は少年がすぐに口を開く。

「殺す」

前触れは、それだけであった。その言葉を言い終わると同時に、いや、あるいは言葉を口にしながら、即座に少年が動く。瓦礫の地面を踏みしめ弾き出されるように飛び、男のいる屋敷の上を目がけ、弾丸を思わせる速度に体を乗せる。

土煙と朝靄が立ち込める空気を貫き、少年と男の距離を瞬時に詰めていく。

しかし、男の反応も早い。少年が飛び出すのとほぼ同時に、スラリとスミレ色の布から腕を見せた。白みがかつた男の腕が見えた瞬間、そこに少年が飛び掛る。手には先ほどの紫水晶の槍が握られている。その槍が、男に向かつて一直線に振るわれた。

その刹那、光、次いで白煙が弾け飛ぶ。

轟音が、辺りに響き渡った。爆風が、周囲の空気に煙と土を飛ばす。交錯した2人の姿が、一瞬で煙に飲み込まれる。

轟音が一しきり反響し終えた後、夜風が吹きぬけ、煙を晴らしていった。その場所は、また一步単なる瓦礫へと近づいていた。原形をとどめていた建物の1階部分も大小さまざまなコンクリートや木材の破片に成り果て、破片のいくつかは庭や生垣にまで飛散し、枝を折り、花々を引きちぎっていた。

交錯した2人の男は、煙の中にまぎれている。よつやく彼らが現れたのは、夜風が爆煙を吹き払うのを待つてからであつた。

少年の方は、先ほどよりも呼吸の音を荒げ、苦しそうな表情を見せる。体中にできた衣服の裂け目に血の筋が覗き、それが少年の感じる痛みを思わせている。そして男と交錯する瞬間に手にしていた紫の槍は、刃の先から持ち手の20センチほど上までが綺麗に無くなっていた。だが、酸素が足りず、全身に切り傷を受け、武器を失つてなお、少年はその眼差しを男に向けていた。

少年に睨まれた男は、相変わらず笑顔を浮かべる。しかもこちらは、傷はあるか、マントに切れ目一つ見えない。

だが・・・・・

「なるほど。さすがに鍛えた甲斐があったようだ、な・・・・・・」

先ほどより更に満足げな表情で、男は少年の方を向く。しかし、その体に大きな違いが生まれていた事を少年は見逃さない。違いは、少年に向けてかざされた男の右腕にあった。ひじを曲げ、マントから少年の方に突き出されたその腕は、爆発の前と大きく違つ点が一つ。

手のひらがザックリと切り裂かれ、そこから鮮血が垂れていた。空氣に触れて若干の粘性を帯びたそれは、手首の辺りで地面に滴つている。

しかし、男はそんな事など意に介さず、それどころか自分が傷ついたという事実を喜ぶかのように、不気味な笑顔を向けている。10メートルほど前で疲労困憊し、それでもなお自分が殺氣を消さない少年に、男は言葉を向ける。

「お前も、私と同じ才能がある」

「・・・・・・・」

男の切り出した話題に、少年は一瞬眼を見開き、表情を曇らせた。わずかな変化ではあったが、それを見逃す男ではない。

置み掛けようつて言葉を放つ。

「一撃で私を傷つけ、あまつさえ、私の攻撃を全てかわしてくる。あの距離で回避する事など、上位の魔力家でも簡単ではない。それを、お前はやつてのけた。荒削りで不完全とはいえ、とにかく致命傷を避けえたのだ。その能力は驚嘆に値する。」

そう言しながら、男は血まみれになった右手をそのままに、マントからゆっくりと左手を持ち上げた。白みを帯びた皮膚の色は夜の闇に浮き上がり、体の中心から2本の白い棒が突き出したように見える。

「もう一度言おう」

男の顔から、笑顔が消えた。無表情になった男の顔は、少年の恐怖を搔き立て平常心を奪いとろつとしている。

「私と共に來い。お前を待つている人間がいるのだ」

凍つてつづみやうなその言葉にさえ、少年は動じなかつた。それどころか、男に向けて一警を加えると、槍の柄を握った手を、ゆっくりと持ち上げる。

「お前は私と同じ人種だ。お前自身は気に喰わないらしいが、これは事実だ。そしてこれは、悲しむ事ではない。

なぜなら、お前が私と同じ優れた人間である事を示しているのだから

淡々と言葉を続ける男に、少年の殺意は最高潮に達する。槍の柄を持ち上げていた少年の腕が、頭の後ろでピタリと動かなくなり、そして・・・・・・

「黙れええつ！！」

男に向けて腕が振り下ろされた瞬間、柄はその手を離れ、男の方に向かっていく。

それは人の手から放たれた事が信じられぬほど、速く、鋭く、正確な一撃。引き絞られた弓から放たれる一本の矢のようだ。紫のガラス質が男に向かう。だが、それが男を貫くかと思われた、その時、男が唇を動かした。

直後、光と爆風と轟音とが、男の目の前に爆発を作り上げる。

先ほどのものより幾分規模が小さかったためか、男の周りからはすぐに煙が消え、その姿が現れる。驚いた事に、あの柄を飛ばす一撃と至近距離の爆風など無視するかのように、男は無傷だった。それどころか、その両手を

少年の方に突き出したその体勢さえ、爆発前と何一つ変わらない。

「まあ、仕方がない」

口調を和らげた男は、少年を見据えて嘆息まじりにつぶやいた。

「今すぐには言わん。『彼』も、お前がすぐに来るとは考えていいなかつた。しばらくお前に猶予を与えよう。
お前が我々を理解し、受け入れるための、な」

言葉を続けるつい、男の両腕に変化が現れる。少年の方を向けた手の平が、白熱電球のように煌々とした光を放ち始めたのだ。しかも、それが見る間に強くなる。

「」のとき初めて、少年の顔にそれまで見られなかつた恐怖が現れた。男は、それを待つていたかのように口を開く。

「3年だ」

瞬間、男は意識を少年から自分の両手に集中させなおし、最後の言葉を口にした。少年は、恐怖をにじませた表情の中、必死になにかを叫び、両腕を目の前に突き出す。

「3年後の今日、お前を必ず連れて行く。それまでは、ゆっくつと待つことだ。息子よ」

爆発は3度目。しかし今度のものは、これまでとは全く規模が違つた。最初に見える光が、家全体を飲み込むように膨れる。そして・・・・・

あたり一面に、轟音よりも速く、灼熱の風が吹き荒れたのだった。

プロローグ 晩の別れ（後書き）

前作「参謀なれの学園生活」を読んでいただいた読者の皆様、お久しぶりです！この小説で初めてお会いする皆様、はじめまして！治部醤油でございます。

今回は前作の最後で予告していた「魔法学園」モノの新連載、その予告編です。この小説は以前の予告どおり、この夏からの連載を予定しております。ですが、ある程度ストーリーも煮詰まり、お待ちいただいている方に少しでも出来ることがあればと思い、今週から3週連続で小説の冒頭3話を掲載することにいたしました！

本格的なスタートをしていないこの作品ですが、もちろん皆さんからのご意見、ご要望を心よりお待ちしております！些細な事でも何かありましたら、よろしくお願いいたします。

第1話 抜き打ち試験（1）

日本国内に数ある魔法学校の中でも、魔法大学附属高校は異色の存在であった。去年創立されたばかりでありながら、国内有数の魔法大学の附属と言つことで全国から優秀な生徒が集まり、生徒の魔法に関するレベルは全国でもぶつちぎりのトップである。魔法に関する訓練のための施設がいくつも必要だつたため、その校舎は都会を離れた片田舎の原野に等しい土地を買い占めて作られ、ゆえに生徒たちはその大半が学校の所有する学生寮から通学している。

その学生寮と校舎をつなぐ道の両脇では、ちょうど桜並木が見頃を迎えていた。薄紅色の花をまつた木々に挟まれ、コンクリート造りの道が学生寮から校舎までをほぼ一直線につないでいる。

そして今日は、魔法大学附属高校の2期生たちが初めてこの校舎へと登校してくる日だつた。昨日の入学式はここからはるか遠く、都内にある魔法大学本校の講堂だつたので、新入生たちが学校に足を踏み入れるのは今日が最初である。校舎から学生寮まで続いているこの道も、あと數十分もすれば校舎に向かう新入生たちが歩いているはずだ。

そんな道をなにやらあわただしい会話と共に歩いていく、2人の少女がいた。

「史波ちゃん、本当に忘れ物無いよね？ 初日から忘れ物なんてシ

ヤレにならないよお「

泣き言を洩らしながら、肩掛けのバッグをガサゴソと掘り返している少女。彼女の名前は、高宮 陽菜 たかみや ひなといふ。陽菜の服装は長袖のシャツに橙色の短いカーディガン、その下に白を基調としたスカート。やや色素が薄めの黒髪をツインテールにまとめ、肩口辺りまで伸ばしていた。顔立ちは、年齢よりもやや幼く見えるが、歳不相応といつほどのではない。だいたい歳2つ分若く見られるかどつか、といった所である。

「そんなに忘れ物を気にするなら、朝早く起きて確認しておけばよかつたじゃないですか。だから早めに起きなさいって

昨日言つたのに

「だつて、昨日は列車に乗つて疲れちゃつたから、今朝は眠かつたんだよお

「『そこ』を我慢して起きて下さーーー本当にもう・・・

そして、ぐずる陽菜を優しく諭しているこちらの少女は、周防史波 すおう しなみ。長い黒髪を後頭部でひとつに束ね、腰の辺りまで真つ直ぐに伸ばしている。背は陽菜よりもやや高く、引き締まつてスラリとした体型が凛とした雰囲気を生み出していた。服装は上が純白のブラウス、その下に濃い灰色のブリーツスカート。こちらは陽菜と対照的に、歳よりも幾分大人びて見える。

そんな史波は、さつきから何度も何度もカバンの中身を確認している陽菜を見かね、努めて優しく声をかけた。

「とにかく、持ち物は大丈夫です。何か足りないものがあれば、私が貸しますから」

「う、うん。ありがとうございます、史波ちゃん」

溜め息をつきながらも陽菜を説得する史波。その説得にやつと力バンを探るのをやめた陽菜。2人の関係は、親友と言つよりは母親とその娘、と言つた感じである。ただ逆に考えれば、世話焼きの史波と世話のし甲斐がある陽菜は理想の友人なのかもしない。

「ねえ、史波ちゃん？」

隣を姿勢良く歩いている史波に、陽菜は首をかしげながら言葉をかける。

「どうしました？」

視線と共に軽く言葉を返した史波に、陽菜は不安げな表情で「う尋ねた。

「やっぱり、この学校って魔法ができる人ばかりかな？」

「それはまあ、魔法の専門学校、それも全国でトップの学校ですか、魔法が苦手って言つような人はいないと思います。

少なくとも、入学試験の魔法実技はパスしたわけですから

先ほども触れたとおり、この魔法大学附属高等学校は国内トップの魔法学校である。ゆえに、その入学試験もかなりの

倍率と難易度を誇り、特に魔法の実技、即ち実際に魔法を使つ試験は折り紙つきである。あまりに難しそぎたため、一部の関係者からは「どんぐりの背比べで差がつかないのではないか」と心配されたほどである。

逆に言えば、この学校の生徒はそんな難関試験をパスするだけの力を持つている、とも言える。そんなわけで、魔法については英才とも言つべき陽菜が周囲の魔法のレベルを心配するのも、無理は無いと言つわけだ。

「し、心配だなあ。史波ちゃんはなんでもできるけど、私は『介具』の使い方とかあんまり上手くないし、魔法だって、普通のタイプだし・・・・・・」

心配そうに呟く陽菜。それを聞いた史波はフウ　ツヒーつ大きな溜め息をついてから、「高富さん、いいです?」と半ば呆れたような口調で陽菜に話しかける。

「先週、私と入学試験の点数開示表を見ましたよね?」

「う、うん」

「その時の高富さんの『魔法実技』の順位、覚えてますか?」

質問された陽菜は、あごに手を当ててつむき気味になり、「うん」としばらく唸つていたが、そのままにゅつくつと顔を擧げて、思い出すような口調で答える。

「え　っ、だいたい7位くらいだったかな?」

自信なさげな陽菜の様子を意に介さず、史波は「そつです」と肯定してすぐさま次の質問に入る。

「では、今回の新入生は、全部で何人ですか?」

2度目の質問に、陽菜は再び手をあごの下に当ててしばらく考えてから、自信なさげに答えた。

「んつと、だいたい220人くらい、だつけ?」

疑問にあふれた表情の陽菜に、史波は一言、言い放つた。

「分かりましたね?」

「な、何が?」

「高富さんは魔法の心配なんてしなくて良いんです! 魔法実技の成績が7番だつたんですから、高富さんより魔法のできる人は新入生で6人しかいません! 逆に言えば、残り200人以上の人には勝つてるんですよ」

・・・・・全く、陽菜さんは心配しそぎです。もつと自信を持つてください。

鈍い親友に心の中で愚痴をこぼしながら、史波は再び大きな溜め息をついたのだった。

そんな2人がなおも会話を続けながら5分ほど歩くと、周囲の並木がまばらになってきた。代わりに見えてきたのは、道の先にそびえる巨大な校舎。普通の学校と比べても、大型トラックと軽自動車くらいの違いがある。

(や、やつぱり大きいんだね。教室がいくつでも入りそつ……。)

視線の先の巨大建造物に言葉を失い、ぽんやりと見入っていた陽菜の心に、ふと見慣れた顔が浮かんだ。それは陽菜にとつての憧れであり、大切な存在であり、最大の目標でもある人。今は遠くで自分の夢を追いかけている、「あの人」の事。

「高富、さん・・・・・・」

不意に、何もないところで陽菜が立ち止まる。それに気付いた史波もまた、歩みを止めて陽菜の方を振り返った。

「・・・・・・」

「高富さん？　どうかしましたか？」

心ここにあらず、と言った感じで遠くを見ていた陽菜に、史波が心配そうに声をかける。

「えつ？　あつ、『めんね。史波ちゃん』

史波に声をかけられてやつと心が戻ってきたのか、陽菜は元の笑顔になつて返事をした。

「何だかぼんやりしてましたけど、どうしました？」

「あつ、うん。お兄ちゃん、元気かな、つて・・・・・・」

陽菜の言葉に、史波は思わず「ああ」と相槌を返した。

「結局、春休みの間に戻つて来られなかつたんですか？」

「うう。向こうひどいからじゃ、休みの時期が違ひりじへつて。向こうは夏休みまでずっと学校なんだって」

史波には、陽菜が落ち込みかけている事が痛いほど分かる。だから何とかして、この話を明るい方に持つて行きたかった。

「そ、それにしても凄いですね。魔法で世界一のスイスの魔法学校、それも一番上の学校に留学中ですか？」

「うん。向こうでもみんなと楽しくやって、先生にも褒められてるつてお母さんが言ってた」

「ちちがです。それはそつと、その・・・・・・」

だがここまできで、史波はもつつなげる言葉が見つからなかつた。影の差した陽菜の笑顔を見て、いるだけで、こちらまで気持ちが沈んでいくのが分かる。

「あはは。それでも、夏休みには会えるって言つてたし。電話も手紙もできるから。大丈夫だよ」

陽菜の作り笑いは、史波以外には本当に笑つてゐると同じよう見えただろう。

「じゃあ行こつか、史波ちゃん。速く行かないと置いてっちゃうよ！」

だが、史波には分かる。笑顔で走っていく陽菜の心には、憧れの兄がまた遠いところに行ってしまった事への、無念と悲しみがあふれている。

(高畠さん。本当は、寂しいんですね・・・・)

今の史波にできることは、走っていく陽菜を1人にしないよう、その背中を追いかける事だった。

第1話 抜き打ち試験（1）（後書き）

第2話、更新いたしました！ 今回は3回投稿の2回目、小説の舞台となる学校の紹介のような話です。正直短すぎるかとも思いましたが、区切りが見つからなかつたためこのようになってしまい、申し訳ありません。

さて、3回更新の最後となる次回は、いよいよ主人公が登場。そして念願の魔法バトルシーンが入るかと思います。今回とは逆に、長めになるような気もしますが、何とか来週までに書き上げてきますので、気長にお待ちください。

第2話 抜き打ち試験（2）

魔法大学附属高校の新入生たちが集まる教室は、どこも登校初日
独特の緊張感に包まれていた。200人あまりの
新入生たちはほぼアトランダムで6つのクラス分けられ、その教室
でそれぞれの担任から説明を受けている真っ最中である。
こういう場合、新入生たちは新しい環境に緊張して、担任の教師も
これから面倒を見る生徒たちに隙は見せまいとして、
お互に緊張して様子を探りあつといったことがおこるのが常である。

しかし、例外の教室がひとつだけあった。「1年3課」と札の掲
げられたその教室の中、美しく並べられた机と椅子に
生徒たちがやや固い表情で座っている。だが、その中の一人、周防
史波は今この教室の状況が一向に飲み込めて
いなかつた。なにせ・・・・・

「はい。じゃあ、以上で大体の説明は終わつたから、さつきの
説明どおり、これから皆さんには校舎を回つて
見学してもらいます」

黒板の前、一段高くなつた教壇の上に立ち、先ほどから説明を続
けているのが、明らかに自分たちと同い年くらいにしか
見えない女性だつたからだ。しかも、ジェスチャーたつぱりのその
喋り方は、なお一層彼女が教師だということを疑わせる。

(し、しかし疑う余地はない、ですね・・・・)

彼女が最初に教室に入ってきたとき、もう既に何かがおかしかった。ストレービーをまとい、髪の毛を綺麗に結った先生の見た目に流されたのはほんの一瞬のこと。先生が満面の笑みでこちらに向き直った時点で、まず自分たちと大差ないその見た目に驚いた。

別に担任が女性教師である事は珍しくもなんとも無い。だがここは、国内の魔法学校でトップにある魔法大学附属高校だ。

そんな学校の先生は男性にしろ女性にしろ、大学の教授のよつにもつと年配の先生ばかりだと史波は思っていた。

そんな彼女の眼に、若々しさを通り越してあどけなさを残した担任が来たのだから、史波の考えはもう完全に打ち砕かれていたのである。

いや、それだけではない。別に担任教師の見た目が高校生と同じレベルだつただけなら、いつも冷静な史波は「ずいぶんお若い先生なんですね」と受け流せた事だろう。本当の問題はその後にあつたのだ。第一にその口調。笑顔を振りまき、

元気一杯に教室の扉を開けた先生は、開口一番に「おっはよー！」

今日はいい天気だね！」と挨拶。その口調は気の知れた

友達同士、といった感じにしか聞こえなかつた。それでも史波は「と、とても明るい先生でいらっしゃいますね」と自分に言い聞かし、辛うじてこのテンションの高さという破壊力の高い一撃を受け止める事に成功した。

ところが、史波を困惑させる止めの一撃はこの後だつた。挨拶を済ませ、黒板にチョークをカツカツと走らせて自分の名前を書き終えた先生は、じゅうに向き直つて更に衝撃的な一言を口にした。

「今日から皆さんの担任になりました！ 橘 希華 たちばな のりか です！ 担当教科は魔法実技応用。教師になつてまだ2年目の若輩者ですが、一年間、よろしくお願ひしますっ！」

ペコリと元気良く頭を下げた橘先生を見て、史波は言葉を失つた。

（魔法実技応用！？ そんなの、まさかこの先生が・・・・）

史波は唖然としてその場に固まる。魔法実技応用とは魔法学校独自の教科であり、書面上の定義では「実戦に有用な魔法、及び各種の高等魔法の習得」と書かれていた。要するに、魔法を使って戦う事を教える教科である。

「ついで簡単に聞こえるが、ここで言つ「実戦」とは要するに命を懸けた戦いである。それについて教えるということは、単に魔法を教えてこれを実戦で相手に使いなさい、だけで済まされることは当然だろ。魔法の使い方はもちろん、身のこなし、一瞬の状況判断、相手の考えを読む心理術、

更には相手と戦うという心構えに至るまで、みんなの事を教えねばならない。

もちろんそういったこと全てを魔法実技応用の時間に教えていくわけがないし、実戦と言つても生徒同士が本気で殺しあうなどはほほあり得ないだろ。だが、要するに実戦の魔法とはそれだけ重い教科なのである。それを教えるのが、目の前にいる子どもっぽさを残した先生だと言つことに、史波は自分が耳を疑つたのだ。

そんな史波の驚きなど氣付くはずも無く、橘先生は説明を続けている。今は午後から行なう学校の施設見学について、これまでの説明を確認しているところであった。

「それじゃ、校内見学についての注意事項をもう一度確認ね。特に注意しなきゃならないことは4つ。学校の敷地から外に出ないこと。『介具』は教室に置いておかないで必ず持ち歩くこと。なるべく一人か2人くらいの人数で行動すること。そして、時間までには必ず戻つてくること。この4つの決まりを守つて、みんなで・・・・・・」

相変わらず笑顔を絶やさない橘先生を見ていると、史波にはどうにも彼女が魔法の戦いを教える姿が思い浮かばない。仕方なく「やっぱり他の学校とは違うんですね」などと無理やりな理由をつけ、今の状況を自分に納得させようとする史波であった。

「じゃあ、説明はおしまい！ これから学校を自由に歩いて、好きなところを見てきてください。あつ、そういうの、渡すものが あるから、教室を出る前に必ず私から受け取っていって……。」

史波の視線にふと隣に座つてゐる陽菜が入る。そういうえば、学校を回る時は高富さんを誘わないと。あの子は方向音痴ですから、放つておいたら初日から迷子ですね、と自分の仕事を思い出す史波であった。

「あ、あれですよ高富さん！ あそこにあるのが屋外演習場です」

肌寒さをはらんだ春風の中に、史波の声が流れた。事前に配られていたカラー写真入りの校内地図を見ながら、コンクリートで舗装された坂道を上つてきた史波が200メートルほど先にあるだだつ広い土の地面を指差す。その後からやや息を切らし気味についてきた陽菜は、陽菜の指差す先を見て「うわあ」と感嘆の言葉を呴いた。

「思つてたよりずっと大きいんだね。どのくらい大きいんだ？」

「一応、この冊子によると面積は大体500メートル四方、この学校で3番目に大きな訓練場だつて書いてありますけど」

何気ない陽菜の疑問にも、史波は手にしたパンフレットを見ながらまるで陽菜専属のガイドのように説明を付け加える。

そんなありがたい親友に「ありがとう、史波ちゃん」と感謝の言葉を忘れず、陽菜は再び田の前に広がる景色に心を向けた。

思えば少し前、何だか楽しそうな担任の橘先生からの説明もそこに、自分たちはこの学校を歩き回る事になつた。

橘先生いわく「うちの学校の広さは、口で言つより実際に歩いてみた方が分かりやすいからね」だそうだ。ちなみにこれは

学校として授業の一環だったので、陽菜たちが教室を出て行くときには他のクラスからも生徒たちがぞろぞろと出歩いていた。

そして確かに、少し歩いてみただけでその広さがよく分かる。広い学校というより、一つの街を歩き回つている気分だ。

しかも今2人が歩いているのはあくまでこの学校の「敷地」。学校の外には、広すぎたため敷地に収まらなかつた訓練場、生徒や教師の住む寮、更にはちょっとしたデパートのような生協や、病院まであるのだから驚きだ。

陽菜が学校の広さに感動していた、ちょうどその時・・・・・

ピーン、ポーン、パーン、ポーンと間の抜けた鉄琴の音が響き渡つた。この学校に来て初めて聞くそれに、陽菜は

「あれ？」と小首をかしげる。

「ど、どうしたのかな？ いきなり校内放送なんて。先生は何も言つてなかつたよね？」

そう尋ねられた史波も、放送の意味は分かりかねているようだった。

「まあ、あらかじめ言つてないから校内放送で私たちに伝えるんでしょうけど・・・・・確かに変ですね。

初登校の日に校内放送なんてあんまり聞きませんし・・・・・」

混乱する2人にを尻目に、今度は人の声が聞こえてきた。

「ああ、ゴホン。新入生の皆さん、聞こえてますかな？ 聞こえていない人は聞こえる場所まで移動して、つと、こりや失礼。聞こえない人に言つても聞こえないですな！ ハツハハハハ・・・・・」

スピーカーから流れる本当にどうでもいい『冗談に、陽菜は「アハハ……」と生暖かい笑いで、史波は大きな溜め息で反応した。そんな冷たい反応を知つてか知らずか、声の主は再び「『ホン』と咳払いをし、なにやら格式ばつた口調になつて話を続ける。

「H、新入生のみなさん。改めて『入学おめでとう』やります。さて、今皆さんは校舎内を見学されていると思いますが、これからは少し重要な話になりますので、あ、ひとまずは、その場に立ち止まって話に耳を傾けていただきたい」

なにやら重要な話があるらしいと知り、陽菜は思わず不安になつた。なんだろう? まさか事件? それとも火事だつたりして? だが、事態は陽菜が考へ付いたほど簡単なことではなかつた。

「まず、その、私から皆さんに謝らせていきます。先生方を通して、皆さんを校舎見学に向かわせたのはちょっととした裏があるのです。簡単に申し上げれば、今からちょっととした『抜き打ち試験』を行なおうというわけで……」

「ぬ、抜き打ちしけん……!?

予想もしなかつた単語の登場に、陽菜は思わず叫んだ。『冗談じや

だよね？ こんなのが聞いていかつたもの。登校した

その日に試験なんて、普通1日か2日くらいは置くでしょ？ 彼女の頭の中では、驚きと抗議の声がぐつぐつと煮立った

お湯から湧き出る泡のよつに次々と浮かび上がる。

そんな陽菜の気持ちとまるで無関係に、スピーカーから流れる声は淡々と説明を続けていた。

「さて、具体的な説明に入りましょうか。皆さん方には教室を出る前、担任の先生から小さな液晶画面のついた機械を渡されていります。まず、その画面を見ていただけますか？ タイマーで自動的に作動しますから、もう画面が点いていると 思いますが。ああそうだ、絶対に余計な部分に触ってはいけませんよ！ 特にボタンは絶対に押さないこと！」

陽菜は言われたとおり、教室を出るときに先生が渡してくれた機械をポケットから取り出した。すると確かに、先ほどまで暗いセピア色一色だった画面が白っぽく光り、画面になにやら数字の「2」、その下に「0」が6つ並んで表示されている。隣にいる史波の機械を覗き込むと、そこにも「2」の文字と6つ並んだ「0」があった。

「見ましたか？ 今画面に出ているのは1から3までの数字、そしてその下に、時間が00分00秒00と表示されているはずです」

説明を聞きながら陽菜はもう一度自分の画面を見直し、特に変なところは無いよね、と一安心。

「さて、抜き打ち試験のルールを説明いたしましょう。この試験は、簡単に言えばグループ対抗の魔法戦と言つ事になります。いま皆さんの機械に書いてある1から4までの数字、それは皆さんのグループの人数であります。近くに同じ数字の人はいますか？ その人と同じグループになるというわけです」

（良かつた、じゃあ私と史波ちゃんは同じグループなんだね）

「これから試験が始まりますが、皆さんは学校見学を続けていただいて結構。一緒にグループになった人と、校舎を自由に巡ってください。しかし、途中で他のグループと会うことになれば、少し面倒になります。もし、出会ったグループが合わせて4人以下、例えば2人と1人の場合、そのグループは新しく3人グループとして一緒に回つてもらうだけです。ただし！」

「ここに来て、スピーカーから流れる声量が、明らかに大きくなつた。

「もし仮に出会つたグループが合わせて5人以上、例えば3人グループ同士の場合、下の表示が10分から始まります。

この表示が0になれば、そのグループは残念ながら試験から即失

格となります。これを防ぐ方法は一つ。出会った

相手チームの誰かの機械をもらって、その機械の裏にっているボタンを押す事だけです。しかし、ボタンを押された方のチームはその時点で失格。つまり・・・・・

一瞬の間があつた後、スピーカーがこれまで一番力のこもった声で校内の空気を振るわせた。

「合わせて5人以上のチームが出会つた場合、先に相手のチームの機械を取つたチームだけが残る事になります。もちろん、皆さんには魔法を学ぶ生徒です。それぞれの魔法を駆使して相手の機械を取つても一向に構いません。否、チームで力を合わせて魔法を使うことが、今回の試験内容そのものです」

ここまで喋り、スピーカーからの声がしばし途切れ。だが聞いていた陽菜は一息つくどころか、もはや何が何だか分からなくなつた。なにせ自分の魔法にほとんど自信のない陽菜のことだ。魔法で他の生徒と戦うなんて、正直怖すぎる。

「なお、魔法の使用に際しては安全に注意を払つてください。皆さんも知つてのとおり、この学校には魔法の使用に対応するための安全装置が多数配備されていますが、それを完璧にするには、皆さんの協力が必要です。相手を怪我させる事の無いよう、節度を持つて試験に当たつていただきたい。それもまた、今回の試験材料です」

一語一句噛み締めるような口調で注意を述べた声の主は、最後に
こんな言葉で締めくくった。

「ちなみに、今回の試験は皆さんの成績に一切考慮しません。ただし、ここは魔法を学ぶ学校です。明らかに戦意の無い行為、魔法による戦闘を故意に避けた者については、それなりの対応をさせていただきます。また、これから1時間半の試験時間を失格せずに残った人には、校内にある購買の商品券、2万円分を山分けしていただきます。それでは、健闘を祈りましょう。只今より、試験開始！」

その言葉と共に、再び氣の抜けた鉄琴のよつた音が校舎中に響き渡った。再び静かになった競技場前に、競技場の砂ぼこりを含んだ風がもう一度吹きぬける。太陽はずいぶん高くなつていたが、心なしかその風は先ほどよりも強く、寒さをはらんでいる気がした。その風に髪をなでられ、陽菜はその場に立ち尽くす。

「し、試合始まっちゃったみたいだね。どうしようか……」

突然の放送がまったく飲み込めず、頭の中が混乱している陽菜。対して隣に立つていてる史波は落ち着いていた。

「まあ、たかが校内見学に介具を持つて行くやら、変な機械は渡さ

れるわで妙だとは思っていたんですが、ね。

まさか抜き打ちで実技試験とは、この学校らしいですね・・・・・

あくまで冷静に、淡々と言葉を述べながら、額に手を当てて考えをめぐらせる史波。

「どう、どうぞ。正直あんまり自信ないから戦いたくないんだけ
ど」

「確かに、私も同じです。ただ・・・・・」

両眼を軽く閉じ、難しそうに眉を寄せてしばりく考え込んだ後、史波はポソリと呟くような言葉を口にした。

「まずい、ですね」

「えつ？ まずいつて、何が？」

史波の言葉に不安を煽られ、恐る恐るといった様子の陽菜の質問。

端的に答え返した。

「確実に戦わなきゃいけないってことです」

戦わなきゃいけないなんて、陽菜にとつてはあまり、といつか非常に嬉しい、怖い事実であった。どうしよう。この学校で戦うのは初めてだし、本当に大丈夫なの？ そのどうしようもない恐怖をかき消すため、何とか史波の口から樂観的な言葉を聴きだそうとして陽菜は「で、でも」と更に問いかける。

「IJの辺りは人も少ないし、物陰にでも隠れていればあんまりばれないんじゃないかな？」

「ええ、ですが学校はそれじゃ試験にならないと思つたんでしきう。私たちを戦わせるために、『商品は山分け』つてことにしたんです。そうすれば、残つた人が少ないほど取り分は多くなりますからね。腕に自信のある生徒は、積極的に他のチームを倒しに行きます。それに……」

「それに？」

「さつきも言われたとおり、戦意の無い行為は禁止ですから。少なくとも歩き回るくらいはしていないと危ないですね」

冷静沈着な筋道が立っていた史波の言葉に、結局「戦わなくともいいんじゃないかな?」という陽菜の希望は完敗だった。

「へ、ひひ。やっぱり、戦わなくちゃいけないのかな?」

「まあ、そういう場所ですし。それに歩き回れば、1人が2人の味方に会える可能性もありますから」

史波の言つとおり、時間が立てば経つほど、他のチーム同士が合流してしまつ。そうなれば敵になつた時も面倒だし、そもそも味方になる1人や2人のチームも少なくなつてしまつ。2人のままで4人のチームと何度も戦うなんて、いくら魔法力の高い陽菜や史波でも危険としか言いようが無い。

「そ、そうだね。じゃあ、行こつか

まだ恐いと感じてはいたが、そうしていてもしちゃうがない。腹をくくつた陽菜は史波を誘つてその場から歩き出そうとする。だが一步田を踏み出そうとした瞬間、史波が「そうだ、大事な事を言い忘れてました」と陽菜を静止した。

「一応介具はいつでも使えるようにした方がいいでしょう。奇襲や遠くからの攻撃のような事も、無いとは言い切れませんし」

そう言いながら、史波は先ほどまで自分の背に斜めで結び付けていた一本の長い棒のようなものを手に取った。

史波の身長よりやや長いツヤのある木目部分。その先には、白いさらし布でぐるぐる巻きにされた細めの半月を思わせる部分が伸びていた。スラリと長く、洗練された中にもしっかりと美しさを引き立てたそのフォルムは、

どこと無く持ち主の史波を思わせる。

そのフォルムは、いわゆる「なぎなた薙刀」であった。先端の刃には布を巻いているものの、その鋭さがあたかも液体のように、布の下からジワリジワリと染み出すのが感じられる。

史波の様子を見て、陽菜も自分の手に持った一本の杖を持ち直した。史波のものより短く、真っ直ぐに立てれば陽菜の首筋辺りまであるつと思われるその杖。真ん中辺りになめし革を巻いた持ち手がある他は、まるで森に落ちている折れたばかりの枝のようであった。不規則な曲がり方、薄く塗装されただけの表面、おおよそ人工物らしからぬ形をしている。

史波の薙刀や陽菜の杖。これらはこの学園において、いや魔法を使う者の間では決して珍しいものではない。それどころか、それが無い事の方が不自然とされている。これこそ、先ほど史波の言った「介具」、正式には「魔法媒介専門器具」である。

この介具には主に2通りの使い道がある。第一の目的は、「魔法を発動する手つ取り早い発生源」である。

例えば魔法を使って火を放つ人間を思い浮かべてほしい。火を放つ時、その火をどこから噴き出すかというのは意外と難しい問題である。手の平から噴き出そうとすれば、手に炎の熱が伝わってしまい火を操る所ではない。では自分の周りにある適当な空間から出せばよいと思うかもしれないが、場合によってはそれが難しいときもある。

例えば、自分の周りを他の人間の放った炎が包み込んでいる場合などだ。だがそんな時、介具があればそこから火を放ち、操る事ができる。それに人間の手に直接触れた介具は、周囲の空間などと比べて魔法の発動も簡単である。これが介具を使う第1の目的。

しかし、仮に介具の目的がこれだけなら、何も武器である必要はない。その辺の棒切れやら鉄パイプやらでも同じような事が出来そうである。また、ある程度魔法に長けた者はそもそも介具から魔法を放つ必要がほとんどない。自分の手だろうがその辺の空間だろうが、好きな所から火を出せるのだ。

しかし、そんな彼らでさえも介具は持ち歩いている。それは、介具第2の目的「武器としての使用」の期待しての事だ。

要するに、魔法だけで戦うよりも剣で切りつけたり、杖で殴つた

り、槍で突いたりしながら戦つた方が強いのである。しかも、魔法を使えば自分の身体能力を上げたり、武器の力を極限まで引き上げたりする事もできる。これが、介具の必要とされる最も大きな理由であった。

そんな魔法を使うものの象徴とも言つべき介具である。まして魔法の戦闘も「う」この学校の生徒がもつていなくていい訳が無い。教室に剣やら杖やらが並ぶ異様な光景も、決してどがめられるものではないのだ。

「うわあ、久しぶりだね。史波ちゃんがそれを使うの」

史波の介具である薙刀を見て、陽菜は心の底から「う」まじく思う。魔法で戦う試験の最中である事も忘れ、自分の介具に眼を輝かせて見入る陽菜。そんな様子を微笑ましく思いながら、史波は嘆息交じりにたしなめる。

「さあさあ、今は薙刀を触つていい場合ではないですよ。行きましょ」

史波の言葉に、やや不満そうに陽菜も「はあ、い」と返事をし、史波の後について歩き始めようとした、その時だった。2人の機械に「ボン」という独特的の電子音が響いた。

「きなりの事に「な、なに?」と声を上げる陽菜。そんな彼女

をよそ田にて、史波はすかさず音を響かせた機械に

田をやる。今の音、ひょっとしたら周囲に敵が現れたのかもしない。そうなれば、早々に魔法を使つた戦闘になる。

2人に緊張が走つた。

だが、機械を眼にした史波の表情はゆっくりと緩み、やがてホッと息を吐き出した。まだ不安そうに「どうしたの」と尋ねる陽菜に、史波は「見てください」と言つて自分の機械を差し出す。それを見て一瞬の間の後、陽菜の表情もパッと明るさを戻した。

それまで「2」となつていた数字が、「3」になつていたのである。つまり・・・・・

「一緒に回れる人が、増えたって事だよね？」

「ええ、おそらく誰かが歩いてきたんでしょう。とにかく良かつたですよ。3人になれば、他のチームと戦う時も楽ですからね。とりあえず、その人を少し探ししてみましょ」

「うん。手分けして探した方がいい?」

仲間が増えた。そのことに嬉しそうな陽菜の質問にも、史波はあくまで冷静だ。

「いえ、バラバラになると万が一他のチームとあつたときに大変ですから、ここは万全を期して2人でいきましょ」

「そつか、さすが史波ちゃんだね。じゃあ、行こつか」

そう言って、2人はひとまず競技場から離れ、もと来た道を戻る事にした。さえぎるもののが無く、一面の平坦な土地である競技場は見晴らしがよかつたため、人がいない事も一目でわかる。ゆえにそちらは探しても無駄だというわけだ。探す相手は近くにいるはずだし、とりあえずもと来た道を戻りつ。そう考えて2人が振り返ると、そこには・・・・・

「あ、あのっ！　すみません！」

「わっ！　だ、誰！？」

振り向いた眼と鼻の先に、1人の人物がいた。いきなりの登場と声に、2人はは思わず声を上げ、手にした介具を突き出して後ずさる。だが、その様子を見ていた相手も陽菜の反応には驚いたようで、腰を抜かして地面に尻餅をついた。

「「」めんなさい！　脅かしてしまつつもりは無かつたんだけど」

何とか立ち上がりながら、慌てて謝る日の前の相手。それを聞いて2人もようやく少し落ち着きを取り戻し、改めて目の前にいる相手を確認する。

その瞬間、2人は思わず言葉を失った。

そこにいたのは、抜群の美少女だったのだ。陽菜もこれまで綺麗だと思う同性にはたくさん会つてきたが、彼女はその人たちの中でも一番かもしれない。肩まで延びたセミロングの髪は黒々と光り、根元から髪先まで全く乱れずに素晴らしい曲線を描いている。切れ長の眼、小さく整つた鼻や唇はどちらかと言うと清楚な美しさを湛えており、いわゆる「大和撫子」の雰囲気が漂う。遠慮なく元気だけが取り柄の自分とも、どこと無く刃のような鋭さを持った史波とも違うタイプであった。

身に付けているのは、みな私服姿のこの学校の生徒の中でも非常に珍しい衣服である。お祭りで女性が着る浴衣のような和服の上に、裾が長くマントのような黒染めの羽織。何だか時代がかつた服装で。そして、腰には帯紐で巻かれた何かが見え隠れしていた。良く見ると、それは時代劇などでよく日にする日本刀の柄つかそのものである。陽菜たちが着ればなにやら仮装パーティーかコスプレ会場のようなその出で立ちも、この少女にかかる美しさを引き立てる最高のファッショ�다。

「……」になると「美しい」を言葉にする気さえ起きなくなつた。その美しさにただ見とれて、陽菜は思わず「ハア」と溜め息をついてしまう。しかし、田の前の少女その溜め息に不安そうな表情となり、おずおずとその整つた唇を開く。

「あ、あの、本当に大丈夫？」

眉をひそめ、心配そうに目線を向けるその顔もまた可愛らしい。その可愛らしさに見入つてしまいそうになるのを何とかこらえつつ、陽菜はたどたどしい言葉を返した。

「だ、大丈夫、大丈夫。気にしなくつていいよ。それより、さつき話しかけてくれたつける？」

「う、うん。あ、あのね、僕も良く分からんだけど。これの音が鳴つたから、味方の人が近くにいるんじゃないかなって思つて、それで探そうとしてた所なんだ」

そう言つて、相手は機械を持った自分の手を2人に差し出す。その画面には、2人のものと同じ、3という数字が表示されており、それを確認した史波は「ああ、そういうことですか」とすぐさま納得して頷いた。

「陽菜さん。この方が私たちのチームメンバーですよ」

「ほ、本当？ なんだかすぐに見つかっちゃったね」

嬉しそうに言葉を交わす2人に、それを見ていた美少女の方も安堵した表情を見せた。

「えっ？ やつぱりそうなの？ 私もさつき放送が聞きやすいやつにここまで来たら、機械に3つて出てたから、この辺りに人がいるかなって思つて探してたんだけど」

「じゃあ、ほほ間違いありませんね。さつき放送で言われたばかりなので、絶対とは言い切れませんが。とりあえず3人で動きましょう。何かあつたときも、仲間がいた方がいいですから」

史波のリーダーシップで事はまとまり、3人は同行することとなつた。お互に顔を見合させた3人の中で、陽菜はまず自己紹介からね、と名前を名乗る。

「私は高宮 陽菜。これからじぱりへ、ようじくね」

「周防 史波と申します。よろしくお願ひします」

2人が名乗り終えると、相手の美少女も笑顔を見せ、その澄んだアルトの声で丁寧にあいさつを返した。

「うん。僕は南御寺 彩人 なんおんじ あやと だよ。高畠さん に周防さん、これからよろしく」

何気ない挨拶と共に、軽く会釈をする彩人。だが彩人が目線を戻すと、2人がいきなりの大声をあげた。

「ええっ！？ な、南御寺！？ 南御寺つてあの『式紙使い』の！？」

「う、うん。一応、ね」

完全に無我夢中で尋ねる陽菜の質問に、彩人は苦笑い気味で頷いた後、慌てて言葉を付け足す。

「で、でも全然、僕なんて式紙も未熟だし、武術の方も苦手だしね」

やや自嘲を含んだ苦笑いと共に軽く答える彩人。

「し、しかし本当に南御寺家のような家が、いらっしゃるとは。まさかですね」

陽菜や史波が驚くのは、当然である。南御寺と言えば魔法を使う人々、いわゆる「魔法家」の間でも名門として名が知れていた。まだ学校に上がつたばかりの史波や陽菜でさえ、その名前を使う魔法の特別さは幾度と無く耳にしており、南御寺といえばかなりの尊敬と驚きを感じるのだ。

だが感心する2人に、彩人は何かバツが悪そうである。

「ほ、本当に気にしなくていいよ。正直、南御寺家って見られるのは、ちょっと苦手だから……」

そう言つ彩人はなにやら困つたような表情になり、声のトーンを落としていた。それを聞いた2人は、ハツと気がつく。

彩人はきっと、これまでも南御寺家というだけで特別扱いされ続けてきたんだろう。だが、彩人にとってまず大事なのは「自分が南御寺家である」事ではない。陽菜や史波と同じく、「自分と言う1人の人間である事」なのだ。それに気付かず、南御寺と言うだけで勝手にはしゃいでしまったのでは、彩人も傷ついてしまう。反省した2人はすぐさま彩人に頭を下げる。

精一杯に謝る。

「も、申し訳ありませんでした。勝手に騒ぎ立ててしまつて」

「う、うん。ごめんね彩人ちゃん私、彩人ちゃんにひどい事言つちやつたね」

彩人の表情を伺いながら、必死で謝る2人。そんな2人の様子を見た彩人は、表情を和らげ「ううん、気にしてないよ」と声をかけた。そんな彩人の優しさをありがたく思いながら、陽菜が一言付け加える。

「ほ、本当にごめんね。彩人ちゃんだけ普通の女の子だよね。それなのに・・・・・」

この言葉に、彩人の表情は再び曇つた。ただし、今度は先ほどの困った表情とはやや異なる。先ほどの表情が極端に言えば「傷ついている」だとすれば、こちらは「はにかんでいる」とでも言つべきだらうか？ とにかく、下げた頭を上げるや否や、その表情に気付いて陽菜は不安げに尋ねた。

「ま、また何が変な」と言つちやつた？

その質問に、彩人は顔を赤くしてうつむけ、体の前で合わせた腕

をモジモジとすつ合ひわせる。

「ううん。 そうじゃないんだけど、僕はね」

彩人の顔が茹で上がったように赤く染まり、両まぶたがギュッと強く閉じられ、地面にこぼれるような声が聞こえてきた。

「お、男、なんだ・・・・・・」

それを聞いた陽菜は、「あっ、そうだつたんだ」と自然な反応を返した。

「彩人ちゃん男の子だつたんだ。私すっかり勘違い・・・・・・」

こんな風に平静に話せたのも、その後はなかつた。数秒の間の後、陽菜と史波の声が当たりに響く。

「え、えええつ　！　お、男の子！？」

第2話 抜き打ち試験（2）（後書き）

更新遅れて申し訳ありません。ストーリーの一部をいじつてしまい、前半部分をザックリ変えなければならなくなってしまいまして。・・・・・遅ればせながら、第3話更新しました。

ただ、ここまで読んでいただいてお分かりになつたと思いますが、前回予告していた主人公の登場、バトルシーンが皆無になつてしましました。読者様に一度言つた事を守れないのは申し訳なさすぎますので、当初の予定を変更し、次の第4話までを予告編としたいと思います。それでも「最初の3話分を出す」と言つお約束からずれてしましましたが、こちらの方がまだマシかと思いました。3話が長くなつて半分ずつに分かれたと寛大にお考えいただければ嬉しい限りでござります。

それでは、次回こそ本当の第4話、更新急げるよつに頑張つてまいりますので、今しばらくお待ちください。もちろん、感想やご指摘もお待ちいたしております。

第3話 抜き打ち試験（3）

青空の下、魔法大学附属高等学校に建てられたとあるコンクリート造りの建物の屋上。そこに立つて無表情に下の様子を見下ろす1人の少年がいる。黒い上着にベージュのズボンというスタイル、屋上の強風にサラリと流れる髪型や、氷のような鋭さを湛えたその顔は、容姿端麗と言つより冷徹と言つた方がはるかに正確だった。

彼は何を口にするでもなく、何か動くでもなく、ただ淡々と下の光景を見つめている。いや、ひょっとしたらその目は下の光景さえ見ていないのかもしれない。ただそれが思考を邪魔しないために最も優れた行動であるから、しているだけなのかもしれないのだ。

「さて、旦那。 そろそろ行きましょうぜ」

そんな人を寄せ付ける気配の無い少年に、後ろから思いのほか軽な口調で声がかかつた。

「珍しいですね、旦那が自分からこういう競技に参加されるとは

声をかけたのは、屋上のはぼ真ん中に腕組みをして立っていた人影であった。耳や眉、首筋の上辺りで切つた

その髪形に、橢円形の縁無しメガネ。体型は全般的に細く、お世辞にも筋骨隆々とは言いがたい。ただ眉を下げて笑みを含ませたその顔立ちからは、どこに無く人を食つたような余裕たっぷりの態度が見える。

そして一番変わっていたのはその服装であった。長袖のシャツと黒っぽいズボンの上には、なんと医者や科学者の着る白衣をまとっていた。白衣の胸や両サイドについたポケットからは、なにやらガラスや金属、ゴルク栓といった怪しげなものが見え隠れしている。

そんな彼の言葉にも、「旦那」と呼ばれた方の少年は相変わらず地上を見下ろしたままだった。ただ、耳だけはしっかりと傾けているらしく、相手の質問には意外に感情のこもった答えを返す。

「分かってるだろ？ 別にやりたくてやつてる訳じゃないし、本当ならすぐ失格になりたかったんだ。
ただ・・・・・」

少年は心底うそをついた風に眉をひそめた。

「あの学園長が、色々とつるさかつたんだよ」

そんな愚痴を聞いた白衣の少年は、「まあまあ」と相手をなだめにかかる。

「ま、どうせやるなら楽しくやつしましょ。オイラと田那なら負けは無いでしょう、田那が田に見えた魔法を使つ事なんてやつ無いですよ」

そう言って白衣の少年はへラへラと笑う。相変わらず人を馬鹿にしたその口調は、他の誰かが聞いていれば間違いないなく不快に思つただろう。彼自身もそのことには気付いていたが、別に今なんと言おうが自由だ、と思つているのか気に留めた様子一つ見せない。

「オイラも弱いものいじめは嫌いですけど、この手のゲームは大好きなんですね。ま、適当に歩いて、さつさと他のチームを見つけて、サクサク倒していくましょ」

「悪趣味だぞ、佑。そんな下らない事に魔法を使つのは好きじゃない」

伊織と呼ばれた少年は、怪訝そうな表情で白衣の少年をとがめた。だが肝心の白衣の少年はどこ吹く風といったところ。笑みを崩さずに軽々しく話を続けた。

「へへつ、まあ気にせず行きましょつ。とりあえず、校舎の方に戻つてみますか？」

「お前に任せると、薬生 佑 くすき ゆう」

「ありがたい。じゃあ、適当に行きますが、天城 伊織 てんじょう いおり さん？」

祐の言葉を合図に、2人はその場から歩き出した。ここは屋上、ひとまず地上に降りなければならない。しかし、2人の向かう先はドアの先にある階段では無い。その代わり、2、3歩動いたところで彼らはコンクリートのタイルを蹴り、大きく宙に飛び出した。スローモーションで飛ぶ大砲の玉のよう、2人の体は樂々フェンスを飛び越えて高度を少しづつ落とし、やがて地上へと落下していく。

普通に考えれば、ビルの10階に匹敵する屋上から落ちては命の保障などあるはずが無い。だが、2人はそれまるで意に介さず、地面との距離が猛スピードで近づくのにも涼しい顔をしている。そして、次の瞬間に2人の体は地面に接触していた。怪我一つ無く、まるで階段を一段分だけ飛び降りたといった様子で、である。彼らは何事も無かつたかのように、両側の街路樹が木陰を作る太い舗装路を歩き始めた。

「たまにはゆうべつお散歩も悪くないですね」

「ああ。これで魔法の戦闘[アーリ]やえやらなくていいなら、最高なんだがな……」

視線を空にやりながら、伊織は恨みがましそうに懶[ル]をこぼした。
そんな彼の心底つまらなさそうな様子を見た祐は、
「もう言わな[アーリ]よ」と伊織に相槌を入れつつ彼の気分を変
えようとする。

「相手が出たら出たでオイラが遊んでやりますよ。田那は自分が怪
我しないよう、気をつけてください」

「悪いな祐。少しなら俺もやうつか?」

「まあ、それなりの相手に会つたらお願ひしますよ」

会話をしながら歩き続ける伊織と祐。だが先ほどからのんきに歩
いているこの2人には、おかしな点がいくつもあった。

まず第一に、1人とも魔法を使うこの学校の生徒には必須と言つべき「介具」を持っていない。他の生徒がほぼ例外なく
何らかの介具を持ち歩く中、彼らは手にも腰にも背中にこも、体中ど
こにもそれらしきものが見当たらないのだ。

それだけではない。今は魔法の実戦試験中であり、他の生徒たちは警戒をしている真っ最中である。本来なら時々立ち止まって、辺りの気配をうかがったり、魔法を放つ介具や腕を構えたりといった行動があるはずだ。少なくとも、周りの様子を常に見渡しておくくらいのことはしているはずである。

にも関わらず、彼ら2人の行動には警戒心の欠片も無い。表情にあまり変化を見せず前を向きっぱなしの伊織などはまだマシな方だ。前を歩く佑に至っては、欠伸はするは、空は見上げてゐるは、と自分の目の前さえともに見ていかさえ怪しい節があつた。

そして最大の謎は、そこまで無防備な2人が一向に敵チームの出現を恐れていないということ。伊織にしろ佑にしろ、その表情に一切の不安や恐怖が見られない。

こんな奇妙な2人連れが歩いているのは、学校の校舎に続くいくつかの道の一つだった。周囲を街路樹や建物に囲まれ、周りからはそれなりに隠されていたものの、決して人通りの少ない場所ではない。

そしてそれは、試験中の今もまた例外ではないのだ。

「あの機械からか？」

異変に気付いたのは伊織の方だった。耳に入ってきた電子音に気が付くと、何気なくポケットにあつた機械を取り出し、それに目をやる。そんな伊織に、佑は振り返らないままで「どうしました？」と声だけを向けた。

「他の生徒らしいぞ。人数はわからないけど、3人か4人だな。10分のカウントが始まってる」

「ほう、思ったより早く会つちゃいましたね。それと向こうは、3人みたいですよ」

伊織の手にした機械の画面は、敵が近くにいることを示している。だが、2人の歩みは止まらない。それどころか、遅くなりさえしない。それまでと変わらないペースで進みながら、2人は楽しそうにおしゃべりを続けた。

「お前の事だ。どうせさつきから『見えて』いたんだろ？」

「まあ、ちょっと考え方してましてね。旦那が気が付く10秒くらい前つて所ですよ」

「向こうの様子はどうだ？ じつに気付いているか？」

「いえ、正確な位置はまだ分かつてないみたいですね。2つ次の角、右側からゆっくり歩いてきますよ」

伊織の質問に平然と答える佑。だがそんな彼には一つ、先ほどまでと違つている箇所があった。それは、両目の色。伊織や他の人々と同じく黒と茶色の塗られた黒目の部分が、今はトルコ石のように白みがかった青色へと変わっていたのである。それがいつ起きたのかは、誰にも分からぬ。ただ何の前触れも無く、佑の瞳は青に染まっていたのだ。

「どうすんだ? ここ止まつて向こうが来るのを待とうか?」

「いえ、じつちから出向いてやりましょ。どうせ結果は同じでしょ。面倒な事は早いうちに済ませたいでしょ?」

「まあ、お前がいいならそれでもいい。次の角を右か?」

「そうです。一応オイラが止めますけど、旦那に来た向こうの魔法は適当に捌いてくださいね」

佑の言葉に伊織は「分かつた」と短く答え、会話は一寸中止される。歩みを止めることなく、そのまま田舎の曲がり角に

歩いていく伊織と佑の2人。彼らは「」寧に道の真ん中辺りまで直進した上、そこでゆっくりと曲がる。ちなみに、2人が曲がり角に差し掛かった辺りからなにやら20メートルほど向こうが騒ぎだしたが、特に気にも留めなかつた。

伊織と佑が道を曲がり数歩ほど歩いた時、向こう側の声が「お、おいつ！止まれ！」と叫ぶ。そこで初めて、2人はその歩みを止め、声のするほうに視線を向かわせた。

「ほう、男子3人ですか。まあ、下手に女子と戦つて金切り声聞くよりマシ、ですかね」

自分にしか聞こえないほどの声で、軽く咳く佑。その目前には、この学校の生徒である3人の少年が並んでいた。1人は歯を食いしばつて手に持つた剣を2人に構えており、2人は手にした木製の杖を2人に向けている。そしてもう1人は、刃の先から石突の部分まで同じ金属でできた長い槍を小脇に抱えつつ、2人に向かつて右手の平を突き出すように構えていた。その槍を持った少年が、なにやら上ずつた声で呼びかけてくる。

「ど、どいつもく君たちが戦うべき相手みたいだな！」

「そうだな。あまり戦いたくは無いが」

冷静な、と言つよりこれから戦うという事を意に介していないような口調で、伊織が言葉を返す。その反応を不気味に思いながらも、槍の少年はなお声を発してきた。

「分かつてゐるとは思うが、人数で言えば3対2で君たちが不利だ！
それに僕たちは、ついさつき君たちと同じ
2人組に勝つてきた！ そ、そんな余裕でいいのか！？」

威勢よく言葉を続ける槍の少年だが、相手は少しも表情を変えないことに動搖したのか所々で言葉に詰まる。この3人、またま校舎の職員室を見学している時に放送を聴き、そのままチームとなって行動を共にしていた。そして、つい先ほど女子の2人組と戦い、それなりに余裕を持ったまま勝利を収めてきたところでもある。数で有利だった上、魔法の実力も若干ではあるが彼らが勝っていた。その上少し戦つて相手にこじらの攻撃が通り始めると、怖気づいた相手がさつさと降参して、自分たちから失格になつたのである。

そんな経緯から、3人はちょっとした自信を持ち始めていた。クラスも違う3人は先ほど競技が始まるとまずは言葉も交わしていなかつたが、いざ一緒に戦つてみると魔法と近接戦闘のバランスが取れており、意外と息が合つていたのだ。ゆえにこれから他のチームと出会うことがあつても、前の戦いと同じようにあつさり勝てるだらうと高をくくつっていた。

しかし、3人の目の前に現れた相手は、彼らの想像のはるか斜め

上を行つてゐる。介具も無ければ、魔法の詠唱も準備していない。それどころか周囲を警戒しながら歩いている様子さえない。しばらくはそんな彼らに度肝を抜かれていた彼らも、ようやく落ち着きを取り戻し、まずは目の前の2人に降参を勧めてやることにしたのだ。

「ま、まず警告しておく！ 今ここで君たちの機械のボタンを押し、失格になつてはどうだ？ 僕たちも無理に戦う気は無いし、そっちもたかが購買の金権で怪我はしたくないだろ？」「…

「ええ、怪我なんてしませんよ。ビックリした、ね

全く余裕を崩さない佑の言葉にて、3人の中で剣を構えた少年がしひれを切らしたように「おい！」と声を上げた。

「向こうが降参しないなら、さつとせつまおうぜ！ 最初から戦うのが試験なんだからよ！」

剣を構えなおし、今にも飛び掛つてきそうな体制になる剣の少年。どうやら彼は血の氣が多い性格のようだ。次いで彼の横で杖を構えていた3人目の少年も、それに同調してリーダー格の槍の少年に迫る。

「交渉はもう少し戦つてからでもいいんじゃないかな？」さつきもそうだったしな

「わ、分かったよ！じゃあ、作戦通り、お前が時間を稼いでくれ！俺たち2人は、その間に詠唱を済ませる」

2人に急かされた槍の少年は、しぶしぶといった口調で2人に指示を出した。その言葉で、3人が一斉に動き出す。

「任しとけよ！ぼやぼや詠唱してたら、介具も持つてねえやつらなんて俺だけで片付けちまうぞ！」

そう言つが早いや、少年は剣を体の中心に構え、2人に向かって剣先を先頭に突進した。魔法を使って全身の力を増したその走りは、加速度が普通の人間より明らかに速い。一方、その場に留まつた槍と杖の2人は、なにやら目を閉じてぶつぶつと言葉を暗誦し始めた。

その様子をじっと見ていた伊織は、前に立っている佑に向かってこう切り出す。

「手伝うか？」

「いえいえ。旦那の手を煩わせる事はありませんよ。まあ、少しは向こうのやりたい様にさせてみますんで、適当に逃げてりや十分です」

「悪いな。任せたぞ、佑」

「へいへい。頑張りますよつと」

2人が会話を終えたときには、もはや剣を構えた相手が後5メートルほどまで距離を詰めていた。剣を振り上げる事も、横に振りためる事も無く、ただその切つ先に速度と加速の全てを集めた突きの一撃。佑の体の中心目がけて、高速の剣先が迫っていたのだ。

「喰らえっ！」

だが、剣が体に迫るかと思われた瞬間、佑は自分の右半身を引き寄せて、反対の左半身を斜め前に思い切り突き出した。結果として、佑の全身は右を向いた状態で元いた位置より大きく左にずれることとなる。その目の前を、高速の突きとそれにまとわりついた風がすり抜けていった。

一撃をすんなりと避けられた剣の少年だったが、なぜか突きのスピードを殺して向き直ろうとはしない。それどころか更に

加速を続け、佑の後ろに走りこんでいく。一瞬後ろにいた伊織に突つ込むのかとも思えたが、彼は伊織に剣をえ向けず、そのまま2人の20メートルほど後ろにまで駆けていった。

「攻撃がまるで直線じゃないですか。もっとゆっくり攻めないと、ただの一撃じゃ簡単にかわされますぜ」

離れた敵にアドバイスを送った佑に、敵の少年はニヤリと笑いながら言い放つ。

「まあお前の後ろを見てみな！　話はそれからだ」

「後ろ？」

言われたとおりに佑が目線をずらすと、そこには先ほどの2人が杖と槍をかぎしていた。ただ先ほどと違つたのは、その杖先はオレンジ色に、槍先は緑色に染まっていたということである。杖先の色は光のようにも見えたが、それより真つ赤に熱された鉄の色、とでも行つた方が近いだろう。一方の槍は、一見するとその先端に草の色が反射したようにしか見えないほどだったが、良く見ると確かにそれが光の反射などではなく、薄い薄緑色に染まつた何かである。

「おやおや、これまたずいぶんとやる気ですねえ」

「よしっ！ ぶつ放せっ！」

佑の含み笑いから来る不気味さを書き消すように、槍を持った少年が威勢よく声をかけた。直後、オレンジと薄緑の空間がはじけるように拡散する。杖の先のオレンジ色からは一筋の炎が、槍先からは強烈な風が噴き出した。間欠泉を思わせる猛烈な勢いで噴き出した炎に、爆風を思わせる強風が絡み合つて赤色の爆炎となり、佑、そしてその先にいる伊織をも包み込む。

爆炎は多少の狙いなど無視して伊織と佑に襲い掛かり、2人は瞬時に炎の中へと飲み込まれていった。2人を巻き込んでなお炎は勢いを止めず、彼らのいた場所を中心には地面から「ウウウウ」と燃え盛っている。

その勢いに、風を放った槍の少年は弱気になつていた。敵に怪我をさせないことはこの競技の絶対原則である。先ほどの戦いではあまり本気を出さないうちに向こうが降参してくれたから良かつたものの、今の魔法は相手の不気味さに思わず全力で放つてしまった。

「お、おい、まさかあの中で大やけどなんて事はないだろ？」

「大丈夫だ。俺たちが派手にやつても、ある程度までダメージが行けば学校の安全装置が自動で何とかしてくれる」

「そ、そりだな。さすがにこの程度なら、まだだ・・・・・・」

「大丈夫だろ」と言いかけて、彼の声が止まった。

「大丈夫ですかい？」曰那

「きなり、周囲の空気と燃料を奪われたかのように炎が消え去る。そこにいたのは、着ていた白衣も、両手をポケットに突っ込んだ体制も、含み笑いの表情さえ、何一つ炎に包まれる前と変わらない佑の姿。そのすぐ後に、上から地面に音も無くスタリと着地した伊織の姿だった。

「まあ、面倒だつたんでね。こいつで消しましたよ」

そう言って、彼は自分の目を指差した。パッと見ただけでは普通の人間と同じ、白と黒の瞳。だが良く見ると、その色はまったく普通ではない。真ん中の黒目も周りの虹彩も無い。まるでインクを垂らされたように漆黒の黒目があった。

「う、嘘だろ。詠唱も無しにあれを消すなんて、そんな・・・・・・

「

2人分の魔法。それも詠唱を込めて本気で放った魔法のコンボが何の詠唱も無しに消された。そんな事ができるのは、それこそプロの魔法家でも一流に属するレベルの人間だけである。いくら魔法に秀でたこの学校の生徒でも、それは無理、のはずだった。

「さあ～て、今度はオイラの番ですね

だが、佑はそれを成し遂げてしまった。しかも、ちょっとした魔法を使うかのように、とも簡単に、である。

「二、二二つ。なんなんだ・・・・・・

その場に固まる2人を尻目に、佑は先ほど最初の攻撃を行なった剣の少年の方に体を向けた。その瞳の色は、漆黒から光を反射する金属光沢に変わる。まるで鉄のコンタクトレンズを入れたような、不思議な色合いの瞳。

「さて、旦那。最後の仕上げはお願ひしますぜ

「分かった。しばらく頼むぞ」

そう言って、伊織は剣の少年にゆっくりと近づいていく。だが、剣の少年とてもう戦意を失っている訳ではない。

ここまで余裕を見せられ、そのまま食い下がっては自分たちのプライドが許さないのだ。剣を構えなおし、今度は丸腰の伊織に狙いを変えて一太刀浴びせよつと地面を蹴りだした、はずだった。

だが、そこまでだつた。やや前かがみに剣を構えたままで、少年は伊織がいくら近づいても一向に動く事ができない。それどころか、声を発する事さえ許されない。まるでその場に時を止められたようなその様子に、槍の少年が怒鳴り声を上げる。

「な、何やつてるんだ！ 早く斬れ！ 相手は介具も持っていないんだぞ！」

だが、その声にさえ剣の少年は何一つ反応を示さない。ただ1点を見つめて立ち尽くす彼は、もはや恐怖だけに心を奪われていた。

（ひい、た、助けてくれ・・・・・・ 体が、言う事を聞かないん

だ！）

剣の少年の心の叫びむなしく、どんなに力を入れようと、逆にどんなに力を抜こうとその体は動かなかった。

伊織はそんな彼に何の表情も見せないまま、ただ淡々と近づく。目の前まで来て、伊織は彼の羽織ったジャンバーのポケットに手を差し入れ、すぐに引き戻した。その手には、なにやら液晶画面のついた機械が握られている。

「悪く思つなんて言えないけどな、こいつも別に悪いとは思つてないわ」

そう言つて、伊織は機械の後ろについた大きなボタンを指で押した。同時に、剣の少年はやっと体の自由を取り戻す。だが恐怖に震えたその体は伊織に剣を振り上げるどころか、そのまま崩れ落ちていく自分自身を支えることできなかつた。少年はその場に音も無くひざを突き、しばしの間をおいてカラーンと剣が少年の手から地面に落ちる音が響いた。

「旦那、もう行きましょうぜ。あんまりぼやぼやしてると野次馬が来ちゃいますからね」

「ああ。そうだな」

伊織と佑は振り返り、何事も無かつたかのよつてその場を離れようとする。圧倒的な力を見せ付けた彼ら。

その後ろから、先ほどの槍少年がもはやパーソク氣味の口調で叫びかけた。

「お、お前たちは、何なんだ!? 何を使つたんだ!? どうして俺たちの攻撃をあんな簡単に潰せた!?!?」

訳のわからないものに対する恐れ。それをかき消そうと必死に問い合わせる少年に、佑が白衣の汚れをポンポンと手で払いながら答えた。

「『心配なく。あなた方と同じ、この学校の新入生ですよ』

そう言つて佑は軽く振り返り「ご迷惑をおかけしました」と会釈する。3人を見据えたその目は、すでに何の変哲も無いただの瞳へと戻っていたのが、彼らにそんな事を気にかける余裕など無かつたのは言つまでも無い。

第3話 抜き打ち試験（3）（後書き）

やっと更新終わりました！ 今回の更新を持つて、予告編は全て終了となります。中途半端な作品に付き合つていただけた皆様、本当にありがとうございました！

今回は主人公登場、そして初のバトルシーンです。正直こういうのは初めてなので上手く書けたかどうか・・・・ 文章力の低さに改めて反省です。

この作品の本連載は、夏からということになります。今から連載を開始しても良かつたのですが、これから夏までちょっとした用事で執筆に時間があまり割けなくなってしまうので、もう少々時間をいただきたく思います。

この作品に感想を書いていただいた皆様、本当にありがとうございます！ もちろんこれからも感想もお待ちしておりますので、是非お願いいたします！

第4話 抜き打撃試験（4）

「歴史は証明している。人は争い、傷つけ合い、追い詰めあつ事で、初めて本当の進歩を見ると」

伊織の脳裏に、冷たい記憶が甦ってきた。もつ何年も昔のことなのに、つっこみの間のことよりも強く脳に焼きついた。冷たく、鋭く、そして無慈悲な男の声。

「魔法もまた、その法則に従っているだけだ。魔法とは、戦いの武器なのだと？」

「魔法を使え。傷つけ合い、殺しあうのだ。それがお前の魔法を何に、魔法を磨いてきた。

「魔法を使え。傷つけ合い、殺しあうのだ。それがお前の魔法を何よりも強くする」

傷つけあつ事。殺しあつ事。そんな事で魔法は強くならなこと、伊織はそう信じる事を望んだ。そのためには、自分でそれを証明しなければならない。だが、その方法が分からない。

「…………な、…………んな」

その方法を考え、もう2年以上にもなる。なのに、答えは見つからない。俺は、何をやっているんだ？

「あの男」は言った、3年後、俺を迎えて来ると。その時までに、俺は答えを見つけなきゃいけない。

それなのに、俺が今やっている事はなんだ？ 答えが見つからないだけならまだ良い。それどころか、「いつか証明する時のために」と言い訳をして、「あの男」の言つ通り、戦うための魔法を磨いてさえいる。

「旦那！ 旦那つてば！」

不意に、伊織は聞きなれた声に自分が呼ばれているのに気がつく。その声は思考の中に潜り込んでいた伊織の心を、再び日の前に広がる世界へと引き戻していった。

「あ、ああ・・・・・・ 佑、お前か」

「『お前か』じゃありませんぜ、旦那。何ボサッとしてたんですか？」

伊織の目の前には、いつも通りの白衣を着てこちらを心配そうに見つめる佑がいた。その顔からいつもの薄笑いが消えていたことに、伊織は自分が佑を心配させていた事を知る。

「ああ悪い。考え方してたんだ」

まるで寝ぼけたようにたゞたゞしい伊織の言葉に、佑は心配を通り越して呆れてしまつたらしい。その口で思わず

「ハア」 と深い溜め息をついてから、伊織を咎めだした。

「全く、旦那はマイペースと云つか、何と云つか……」

「悪かった。でももう大丈夫だよ。心配かけたか？」

心底申し訳なさそうな伊織の謝罪。それを見て、佑は内心で若干慌てた。少々言い過ぎたかもしれない。ここはひとまず、何とか話題を別の方に逸らしておこう。

「まあ、旦那がなんでもないなら良しとしましょ。で、取りあえず相手は倒しました。ちょっと時間は食っちゃいましたけどね。それと試験の残り時間も大分減つてきましたから、このまま行けば購買のタダ券はいただきですよ」

取りあえず、佑は簡単な状況説明から入ることにした。その作戦が功を奏したのか、上の空だった伊織が言葉を返す。

「どうか。悪いな佑。もう4度だらう？」

「いえいえ。失格にならうとした旦那を無理に付き合わせてるのはオイラですから、当然ですよ」

やれやれ、やっと普段の旦那に戻りましたね。そう思つて内心ホツと胸をなでおろした佑の顔には、よつやくいつもの薄笑いが戻っていた。それにつられて、普段の口八丁ぶりも再び首をもたげ始める。

「まあ、魔法でやりあうのはあれで最後だと思いますよ。それに残り時間だつて10分くらいですからね。さすがにもう他の

チームには会わんでしょう

「ああ。 さうなる事を祈つとくよ」

「まつ、万が一他のチームと出くわした所で、その時はまたオイラが何とかしますよ」

相変わらず余裕を崩さない佑の言葉。だが、そんな親友に伊織は罪悪感を抱いていた。

もう2時間近く前の最初の戦いに始まり、これまでの戦いで佑は「あれ」を使って敵の動きを止め、その隙に相手の機械を奪つて失格にさせる、という戦いを続けている。だが、佑の専売特許とも言つべき「あれ」は、決して楽に使えるものではない。疲労もすれば、精神的にも応える。何より魔力を湯水のようにドブドブと使い続ける。言葉にも態度にも出してはいけないが、佑は間違いなく樂じやないだらう。

それでも佑が疲れを見せまいとしているのは、自分を気遣つてのことには違ひない。だが、それは俺の甘えだ。遅すぎるかもしれない。だけど自分の甘えに佑をこれ以上つき合わせるのは、申し訳な過ぎた。

「佑・・・・・・」

決意を胸にした伊織は隣を歩く親友に声をかけた。その親友は、やはり疲れなど見せない今まで答えを返す。

「何ですか？」

「もし、もしもだぞ。次に戦いがあれば、だ」

ここで伊織は、最後に残った若干のためらいを打ち消すために一瞬沈黙し、それから再び言葉を吐き出した。

「その時は、俺が、やる。俺が敵と戦う」

伊織がそういう瞬間、それまでニヤついていた佑の顔が凍りつく。それから1秒と経つか経たないかで、佑が血相を変えてまくし立て始めた。

「だ、旦那！？ 本気ですかい！？」

「ああ。冗談じゃこんな事は言わないさ」

「だつて旦那は、魔法を使うのが嫌いなんでしょう！」

「まあ、な。でも最近は、ずいぶん自分の中で整理もついたんだ。最悪、人にぶつ放す魔法じゃなきゃ何とか使えるさ」

先ほどまでのおじけた態度から一転、必死で舌を回す佑。一方の伊織は努めて冷静だ。

「そ、そんなことしなくても、オイラがやりますよ。オイラは旦那の『主治医』ですぜ。そのオイラが、旦那にきつい事をさせひやまえひでしょ」

「佑、俺だつて大分慣れてきたんだ。あれはもう2年も前だしな」

「し、しかしですねえ・・・・・・」

言葉を濁して、何とかして伊織を止める口実を探そうとする佑。そんな親友に、伊織はきつぱりとした口調で言い放った。

「俺がやる。ダメか?」

力強さと、強い決意のこもったその言葉に佑はとうとう根負けした。

「じゃ、じゃあ少しお願いします、ぜ?」

「ああ。任せてくれ」

「や、その代わり!」

今度は佑が口調を強め、体ごと伊織に向き直る。

「旦那一人で戦つていいのは2人までです! それ以上になつたら、残りの相手とオイラも戦います! それと相手が1人だろうと、何かあつたらすぐ割つて入らせてもらいますよ」

その強い口調に、伊織は心の底から感謝した。佑は、決して自分が戦えない事に不満があるわけじゃない。ただ、俺を心配してくれているだけなんだ。その親切まで断るのは、友達のするべきことじゃない。

「ああ、頼むぞ。佑」

そう言つて佑に笑いかけた伊織。その顔を雲の影から顔を出した

太陽が照らした。

「セーフティ、旦那には申し訳……」

そう言いながら元の進行方向へと向き直った佑は、その目を見開き、その場に凍りついた。

「だ、旦那？」

「どうした？」

「そ、その、なんと言つか、残念ながらと言つか」

「」もつた佑は、何度も目を擦っていたが、やがて観念したようにガックリと肩を落とし、弱りきったように言つ。

「もう、来てるみたいですね」

「来てる？ 何が・・・・・」

「何が来てるんだ？」と言いかけた伊織の前に、佑は背中を向けたまま何かを差し出した。伊織が受け取ると、それは競技用の機械。そしてその画面ではデジタル表示された数字が9分後半当たりで徐々に時間を減らしていた。と、言う事は。

「敵のチーム、か・・・・・」

「ま、また、なの？」

つい先ほど、雲から抜けて再び光を降り注ぎ始めた太陽の下。高宮 陽菜は時間を刻み始めた画面付きの機械を見つめたまま、呆然とした表情でその場に立ち止まつた。

「う、6回目、だよね？ これ・・・・・・

「まあ、運が悪いといえばそこまでですが、さすがに終了間際でまた戦いとなると、これは・・・・・・

陽菜の後ろには、同じチームのメンバーである史波と彩人が続く。2人の表情は陽菜ほど分かりやすくはないが、それでも疲労と落胆と少々の怒りが入り混じっていたのは見て取れる。

「何で？」

ポツリと陽菜が呟く。まるでゼンマイを巻かれたオルゴールが鳴り出すかのように、いきなりの事だった。

「何で私たちだけこんなに戦うのよー！ 隠謀？ 隠謀なんだね？ 私たちを憎む悪の組織が、他のチームに催眠術をかけて・・・・・ そうだよ！ きっとそうに違いないよねー！」

いきなり大声で叫びだした陽菜。呆然と見つめるほかの2人の前で、1人だけ見る見るエキサイティングしていく。

「でもどうして悪の組織なんかに狙われるの？ おかしいよ？ そりゃあ、私も昔はお兄ちゃんのケーキをこいつそり食べたり、イジワルしてきた子が窓ガラスを割った事を先生に言いつけたりしたけど、でもそれだけだよ！？」

ヒートアップし始めた陽菜は、大声で訳が分かるんだか分からないんだか微妙な愚痴を叫び続ける。

「ねえ、史波ちゃんも彩人くんも！ どうしてなのか教えてよ！？」

「た、高富さん…………」

「えっ、あの、その～」

そういづする内に陽菜の怒りの矛先は陽菜の脳内で結成された悪の組織から、目の前の史波と彩人に向けられ始めた。訳の分からぬ陽菜の攻撃に、2人はしばし困惑するしかない。

「もしかしたら悪の組織って、2人が作ったんじゃ…………
そう？ そうなのね！？ どうして、どうして私を」

「高富さん～」

錯乱気味の陽菜が叫ぶ愚痴をようやく止めたのは、これまた大声、史波の一喝だった。

「気持ちは分かりますし、私も同じ気持ちです！ でも、ここでそんな事を言つても仕方がないでしょー？ まして不必要に大声を出しても、相手のチームにこちらの居場所を教えてしまいますよ！」

「あ、そ、その…………」「ごめんね？」

「全く。じついう時こそ、落ち着かなければいけないんですよ。それにですねえ、いきなり怒り出しても、何の解決にも…………」

首を落とし、反省のポーズをとる陽菜に延々と説教をし始める史波。その様子を傍から見ていた彩人は、冷静にこう思つた。

（し、史波さんも、陽菜さんを静かにさせるためとはいえ、怒鳴つてしまつていた気が…………）

でもこれを口に出したら、余計ややこしくなつちゃうだけなんだろうな。賢い彩人は、その言葉をひとまず胸深くに收め、2人に「と、とにかく」と切り出した。

「僕は向こうの様子を見てみるから」

そう言って、彩人は和服の懷から白い紙切れのよつなものを取り出し、左手の上に乗せた。それは手の平とほぼ同じ大きさの紙人形。白い和紙の真ん中に「眼」の文字が墨で書かれている。

「す、すみません。南御寺さん。またお任せしてしまつて」

「ううん。僕に出来る事だから、このぐらいなんでも無いよ」

史波を気遣いながら、彩人は紙人形の文字の上に右手の人差し指と中指を置き、なにやら呟いてから、その人形をパッと宙に放つた。その瞬間、人形はまるで意志を持ったかのように彩人の腰ほどの高さで宙に浮く。しかも、直立不動の人がごとく、

きちんと足を下に、頭を上にして、だ。

「さあ、まずは空だ。行け、わが眼よ」

彩人の言葉に応じるかのように、紙人形は空高く舞い上がった。ぐんぐんと高度を上げるその紙人形を、ロケットの打ち上げ場に集まつた観客よろしく、陽菜と史波が心底感心して見上げている。

「あ、相変わらず凄いですね。さすが『式紙使い』の南御寺家の方、と言つたところでしようか」

「うん。式紙つて、これまでお兄ちゃんから聞いたことしかなかつたよ」

彩人が使い、2人が感心する「式紙」は、簡単に言えば魔法を込めた紙だ。今彩人が使つてているのは、式紙の「眼」と書かれた部分から見える光景を術者の目に移す、「眼式」という式紙。式紙の優れた点は、魔法の発動に必要な魔力や意志が、あらかじめ紙人形に込められている点にある。ゆえに他の魔法で必要な詠唱や魔力の消費を大きく抑え、術者は式紙に意志を込めるのみで魔法を発動できる。

そして、この式紙が使えるのは世界で何百、何千万人といる魔法家の中でも、彩人を含む南御寺家の十数名だけ。

ゆえに、この式紙を一日見たいと願う魔法家も多く、そのために南御寺家はしばしば魔法家の大きな会合などで式紙を実演したりもしていた。

感心する2人の目の前で、彩人は人差し指と中指を立てた右手を目の前に掲げ、両目を閉じて意識を集中させる。

彼の眼に映つてゐるのは、式紙の文字に飛び込む光。その光を元に、周囲にいるはずの相手チームを探し続けた。

「んっ。よし……見つけた」

そう言つと、彩人は立てた右手の2本指を少し下げ、それに呼応するかのように空高く浮かんでいた式紙は高度を落とす。彩人の目に入る光景は、徐々に地上へと近づき、豆粒ほどだった人影も段々と大きく見えるようになつてきた。

「どうですか？ 相手チームは見えました？」

「うん。えつと、相手は2人。ここから2本先の道を左に曲がつて、50メートルくらい先にいるみたい。歩いては、いないのかな？ うん、今はその場から動いてないよ。それから持つてる介具は・・・・・あれ？ どこかに隠してるかな？ 2人とも今は介具を手に持つてない・・・・・」

眼を閉じたままで、ゆっくりと見える景色を説明する彩人。その一言一句を聞き逃すまいと、史波は耳を彩人の方に向け、一心不乱といった様子で彩人の言葉に集中する。一方の陽菜は、見張り役だ。介具である杖を構え、周囲から何らかの不意打ちがあつた時のため、眼を皿にして様子を伺う。普段はドタバタした3人だが、いざ戦いとなればここまでしつかりとした連携を組める。その連携と、そして陽菜の魔法、史波の薙刀、彩人の式紙。他の生徒より1枚も2枚も上手であるこれら個人の魔法を使いこなして、陽菜たちはこれまで5回の他チームとの戦いに勝ち続けてきたのだ。

なおも、彩人が相手の2人組を観察していた、その時だった。

「きやあつー！」

眼を閉じ、神経を集中させていた彩人が、突然甲高い悲鳴を上げた。

「ど、どうしました！？ 南御寺さんー！」

「あ、彩人くん！？」

仲間がいきなり悲鳴を発し、慌てた陽菜と史波。その2人に向かって、彩人はゆっくりと口を開いた。

「式紙から、向こうが見えなくなつたの。それも、何も無かつたのに……」

「な、何も無しで、ですか？」

「でも、だつて、そんなはずは無いんだよね？」

式紙に込められた魔法は、纖細なバランスの元に維持され、発動する。ゆえに何らかの魔法を受けたり、介具で直接やられたり、あるいは術者の集中が少しでも途切れれば、式紙はすぐにその魔力を失い、ただの手足と頭が付いた紙切れへと成り下がる。

けれど、今回は彩人の言つように、何の前触れもなく式紙が落ちたのだ。式紙が何かに当たつた訳でもなければ、魔法が使われたとも考えにくい。詠唱もなく、2人の腕さえ動かず、ただ次の瞬間には、式紙から彩人に送られていた光が途絶えていた。

「本当に、魔法も、武器も何にも見えなかつたの。それなのに、いきなり消えてしまつなんて……」

「彩人くん、ひょつとして私たちが何か彩人くんの氣を散らせちゃうような事しちやつた？」

不安げに聞く陽菜に、彩人は首を横に振りながら答える。
「そんな事ないよ。でも、本当に何も見えなかつたのに、どうしたんだらう？」

しばしの沈黙が、3人のいる場を支配する。これまで、こんな事は一度だつて無かつた。あんな小さな式紙に、相手は氣付くはずも無かつた。もし気付いても、それを撃ち落そうとすれば彩人だつて式紙を動かし、魔法なり介具の直接攻撃なりをかわせただらう。

なのに、今度はこちらが気付かないあいだに式紙が撃ち落されたのだ。それほどの力を持つた、正体不明の相手。今度の相手は、これまでの生徒と明らかにレベルが違つ。

「どうしよう。今度の人、ひょつとしたらものすごく強いのかも……」

彩人は自分の式紙を一瞬で落とした相手に、言い様も無い不気味さを感じていた。

「行こうよ」

重苦しい沈黙を破つて不意に声を上げたのは、陽菜であった。

「ここのまま居たって、今度は向こうの人たちがこっちに来ちゃうかもしれないでしょ？　じゃあ、向こうのいる場所が分かっているうちに、こっちから行つたほうが良いんじゃないかな？」

陽菜からの思いも寄らぬ発言に、彩人と史波はしばし固まつていた。けれどやがて、2人もまたゆっくりと言葉を返す。

「高畠さんの言つとおりです。こなつたら、向こうがこちらを探しだす前にこちらから行つた方が良いかもしません」

「や、そうだね。向こうのことが分からないと、どうしようもないよ。それに、逃げるつて訳にも行かないだらうじ……」

3人は額にそれぞれ冷や汗を流しながらも、地面にアスファルトで固められたような足を、ゆっくりと動かし始めた。

「行こうか」

「行きましょ」

「僕も行くよ」

昼時、生暖かさをはらんだ風が地面を駆け、3人の足元に若干の砂埃が舞つた。

第4話 抜き打ち試験（4）（後書き）

読者の皆さん、お久しぶりです。作者の治部醤油で「」ます。

少々遅ればせながら、この小説も予告どおり本連載を迎える事となりました。この小説を楽しみにしていただいていた方々、予告編から「」になつていただいた方々、そしてこの小説に温かい感想を送つてくださった方々、本当にありがとうございました！そして、本当にお待たせいたしました！

これからましまばらく執筆できる時間が取れますので、少しでも更新スピードを上げられるように頑張ります。最後に、何かご意見「」をいましたらいつでもお待ちしておりますので、お気軽にお寄せください！

第5話 抜き打ち試験（5）

「どうだ、佑？　どこまで来てる？」

道路の真ん中に突つ立つっていた伊織が隣にいた佑に尋ねてみる。

「そうですねえ・・・・・・　大分近づいてきました。オイラ達の前にある十字路右の道まで、後100メートルつてどこですかね」

「じゃあ、もうそろそろ来そうか？」

「いえ、何だかやけに警戒しながら歩いてますからね。こっちに来るまではもうしばらくかかるでしょ。まあ、とりあえず」
「」の場でゆつぐつ待ちましょ「」

相変わらずのマイペースな口調だが、佑は伊織の質問にスラスラと答える。だが何かがおかしい。今佑の視線を辿った
先にあるのは、どう見ても倉庫の列だ。その前を歩く人影なんて1人も見えないし、そもそも彼の答えた「オイラ達の
前にある十字路右の道」は倉庫の陰にあり、隠れて何一つ見えるわけがない。

しかし、佑は平然と伊織の質問に答えていくし、伊織は彼の言つ
答えを疑いもしなかつた。

「人数は見えるか？」

伊織の何気ない質問。その質問に、佑は突然「ニヤリ」薄笑いを

浮かべる。これまで倉庫からピクリとも動かさなかつた目線を伊織のほうに戻し、得意げな口調になつて「ねえ、旦那」と切り出した。

「旦那の考えはお見通しですよ。これで相手2人以下なら、1人で相手できるつて期待してたでしょう?」

「言われた方の伊織は表情も変えず、ただ一言

「まあ、な

と返しただけだった。だが、佑はその返答に何を聞き取つたのか、堪えきれないといった感じでクックツと笑いを抑える。

「旦那も早とちりですねえ」

いつの言つただけで、またも笑いを押し殺しにかかる佑に、伊織は若干急かすような口調になつた。

「何だよ? 変に二タ一タしてないで教えろよ」

「要するに、旦那はオイラの口車に乗つちまつたんです」

伊織の慌てる様子を楽しむように、佑はまたしても良く分からないな表現で済ませる。佑の回答が分かりかねた伊織は、もう一度急かすような口調で尋ねる。

「ハア? そりや一体……」

「田那、もう一度冷静になつて考えてみてください」

混乱して少ししかめ面の伊織に、佑はポケットの中で弄んでいた試験管を突きつけながらまたスラスラとした説明を始めた。

「セツキオイラは」う言いましたよね、『2人までなら田那に任せる、それ以上なら、オイラが手伝う』つて。

じゃあ質問ですけど、仮に1人、もしくは2人のチームとオイラ達が出会つたとして、どうなります?』

「どうなるつて、そりやもちろん、戦つに決まって……」

だがそこまで言つて、伊織は文字通り固まつた。それが解けたのは数秒後。

「ああ つ！」

大声で叫ぶ伊織に、佑は得意げな表情を見せる。

「やつと氣付きましたか? ほら、最初の放送で言つてたじゃないですか。この試験では、合わせて4人以下になるチーム同士が出会つても、新しいチームになるだけで戦わないんですよ

「じゃ、じゃあ佑、最初からそれが狙いで……」

「ええ。これで約束は約束ですから、オイラも堂々と田那の手助けが出来るつて算段です」

呆然とした伊織に向かって、得意気な表情で笑っている佑。いくら憎らしくても、もはや伊織はその術中にはまつてしまつてゐる。一度言つてしまつた事はもはや一くじ後悔しようとも撤回できないのが、世の中の厳しいところだ。

その厳しさと、自分の甘さに伊織はこれまであまり変わらなかつた表情を緩め、思わず眉間にしわを寄せる。

「や、油断したか」

「へへっ、まあ、どの道結果は変わりませんでしたよ。向こうにいるのは、3人ですかね」

そう言つてから佑は手慰みの試験管をポケットにしまってんだ。それから眼の色をトルコ石のよつたな乳白した青へと変え、先ほど見ていた倉庫を、いや、倉庫の向こうにいるといつ相手の3人を観察し始める。

そんな佑に、伊織はふと思いついたような口調で「そういえば」と切り出した。

「そういえば、佑

「はい？」

「さつき、一瞬白い布切れみたいなのが飛んできたと思つたら落ちていつたけど、あれもお前か？」

伊織の問いかけにも、佑は相変わらず青の田線を逸らさない。ただ、きちんと反応だけを返していく。

「ええ。どうやら」ひの様子を見ていたみたいなんですね、一応魔力を切つておきましたよ」

「いつ見ていた?」

相変わらず佑の言葉は謎かけのようである。しかも、そのかけ方が上手い。伊織はすぐに佑の思に通りの質問を返す。

「じゃあ、なんだつたんだ? あれは

伊織の質問に、待つてましたと言いたくなるのを抑えながら、佑はサラリと答えた。

「なあ~、ちょっとした『式紙』ですよ

式紙、という言葉の瞬間、伊織の表情に一瞬だけ力がこもる。式紙? 式紙といえば、伊織の知っているものは
一つしか無かつた。

「南御寺の、か?」

「やうですよ。多分、ありやひのひを偵察するためのものですね」

何の気なしの佑の口調。そんな佑に、伊織は最後の質問をゆづく
りと口にした。

「つて事は俺達の相手って……」

「1人は、南御寺家の御曹司みたいですね」

太陽が眩しくなったのか、それとも向こうのいつの様子をもつとよく見るためか、佑は両目を少し細めた。

「それと、残りの2人も相当やりますぜ。1人はともかく、もし2人同時に戦うとなると南御寺の坊ちゃんより厄介かも知れません」

伊織は、しばらく反応を返さなかつた。だがやがて、無表情な目線をゆっくりと佑に向ける。

「…………」

なにやら恨みがましそうな、訝しそうなその目線に、佑は内心でギクリとした。いや、ばれるはずはないでしょう。

そう言い聞かせて不安を振り払い、伊織の言葉に努めていつも通りの余裕で「な、なんです旦那と」応じてはみた。

みた、のだが…………伊織の表情と視線は、更に鋭さを増していた。

「今度は騙されないぞ」

いきなり確信を突く言葉。あまりの勘のよさに、佑は内心で半分諦めてさえいた。

「な、何の事です？」

それでも最後の抵抗を試みる佑。だが、先ほどしてやられていた伊織に茶番を続ける気は無い。さっさと核心を突く事にした。

「本当は、南御寺一人の方が強いんだろ？でも後の2人が強いと言つておけば、俺がそつちの相手をすると睨んだ。違うか？」

「そ、それは……」

余裕も消し飛ばされ、お茶を濁すだけの佑に伊織は自分の正しさを確信していた。そしてどうとう、佑もそれに屈せざるを得なくなる。

「あちや。バレちまいましたか」

うつむいた額に手を当てる佑の身振りは、いかにも参ったという空気が溢れている。だが、佑はまだあきらめてないなかつた。なんとしても、伊織に無理はさせたくない。表面の態度は軽くとも、佑は相當に真剣であった。

「眼」、全てを見通す彼の眼は、こちらへと近づく3人の大まかな魔力や身体能力さえ教えてくれる。今度の相手は、正直シャレになるレベルを超えていた。魔力の高さから言って、3人全員がこの学校でも上位に入るほどの実力者だろう。特に南御寺家の御曹司など伊織と佑自身を除けば、この学校で最も強い生徒の部類に入ると思われた。

強敵と戦えば、伊織は自然強力な魔法を使うだろう。本人は「他人にぶつ放すのは使わない」といった様なことを口にしてはいたが、それでも危険な事に変わりは無い。

伊織は、今でこそこの学校の試験にたやすく合格するほどに魔力

が使える。でも、以前はそれこそ魔法をかじった者なら誰でも出来るような些細な魔法でも使えなかつた。今も自分の全てを出し切ることは難しいだろう。魔法を使えば、

「あの記憶」が甦る。自分が、あまりに恐ろしくなる。かつて伊織はそう言つていた。

となれば、伊織が自分の持てる魔力を開放すればするほど、再び伊織に恐怖を引き起こさせる危険が増える。強い相手と戦う中で、いつそれが出てくるかも分からぬ。それが佑を悩ませる第一のリスク。

そしてもう一つ。伊織には絶対会わせてはいけない人間がいた。

魔法を力としてしか見ない人間。そして、その力でしか他人を見れない人間。更に言えば、力の、魔法のない他者を蔑み、侮辱し、傷つけることをためらわない人間。

人間は自分に都合のいい哲学を採用するものだ。魔法がそれなりに使える生徒ならば、そういう思い違いに至つてしまつてはいるのが少なくない。万が一、そんな連中と伊織が出会つてしまえば・・・・・

（危ないですね。旦那もそうですが、相手も、ね・・・・・）

だから、ここは何か伊織に無理をさせたくなかつた。せめて、一番強い南御寺家の1人だけでも自分で請け負えば、最悪の事態は回避できるだろ？ そう思つた佑は、作り話半分、本当半分の巧みな話を切り出す。

「でも旦那、今度のは半分本当ですぜ。オイラの『眼』は基本的に

1対1でしか使えませんからね。多少強くても、1人を相手にした方が気楽なんですよ

「確かに、そう言われればそうか」

「ええ。そういう事で、始まつたらよろしくお願ひします」

今度は、伊織も佑の申し出に納得した。内心でホッとしながらも、まだ完全に油断は出来ない。万一事がおきぬよう、眼を光らせておかねばならないのだ。

「さて、来ますよ」

そんな佑の言葉は、隣にいる伊織と、彼を守るべき自分への警笛。

佑の言葉とほぼ同じくして、コンクリートの影に一瞬誰かの顔が見えた。ほんの一瞬、わずかに顔の半分が覗いたに過ぎないが、それでも2人が相手の到着を知るには十分であった。

しかしだからと書いて、2人は別に何をするでもなく、歩道に棒立ちで並んでいる。わずかに変化した事を挙げるとすれば、佑が再びポケットに手を突っ込み、今度はなにやら小さなダーツのようなものを抜き出して手慰みを始めた事、だろうか。

10秒ほど後、今度の変化は大きかった。先ほどと同じ倉庫の影から、3人の人影が飛び出したのである。人影はそのまま道の真ん中辺りで右に急カーブし、伊織と佑の方に向き直る。1人は、杖を手にしたツインテールの少女。

2人目は、腰まで届くボニー テールに刀身をさらしで巻いた薙刀の

少女、そして最後の1人は、和服姿になにやら白いひらひらとしたものを持った、ストレートヘアの美少女であった。

「ほう、中々隙がないじゃないですか」

佑にそう言わしめるほど、3人の登場は見事だった。2人と3人は、その場でしばし向き合つたまま、動かない。

「あなた方が、相手、なのですか？」

ポニー・テールと薙刀の少女であった。その言葉に、佑が笑みを浮かべながら応じる。

「ええ、まあ。オイラ達とあなた方とで、戦つみたいですよ」

「そう、ですか・・・・・・」

ポニー・テールの少女が段々と語尾を下げるは、続く言葉が思いつかずなのか、最後の最後で戦う事になつた

自分達の不運を嘆いたのか、それとも戦うという事それ自体が憂鬱だつたのか。

「旦那

佑の言葉が、今度は伊織に向けられた。

「あの和服のが南御寺です。オイラが止めますから、残りの2人をお願いします」

「ああ、分かった」

一瞬、2人は視線を交わす。短い言葉と、一瞬の視線。それでも2人の心は通じ合った。そして最後の言葉は、杖を構えたツインテールの少女からだった。

「じゃあ、い、行くよ…………」

アスファルトに映った5人の黒影は、一斉に動き始めた。

第5話 抜き打ち試験（5）（後書き）

第5話、ようやくの更新です。更新が大変遅れ、申し訳ございませんでした。受験生の夏の忙しさ、そして自分の文章力のひどさ、2つを悔っていた作者のミスです・・・

今回の話、当初はバトルシーンまで続く予定でしたが、あまりに長くなつたので直前で切つてしましました。バトルシーンは次回、何とか今回よりは間を開けずに更新いたしますので、お許しください。最後になつてしましましたが、ご意見、ご感想をいただけた旨さま、心よりありがとうございます。

第6話 抜き打ち試験（6）

お互いの動きを合図に、それぞれが一斉に動き出した5人の生徒。そのうちの1人である伊織は、前方に小さく跳びながらも他の4人に目をやる。

隣にいた佑は、南御寺の人間だという和服姿の少女に向かつていった。その和服少女は手になにやら薄くて白い紙切れのようなものを2、3枚。あれが噂に聞く「式紙」だらう。まあいくら南御寺とはいえ、佑が押されると言つていたから今すぐに心配する必要はない。佑の本領は、相手を妨害するところにある。

だが、その佑が疲れている以上、なるべく自分がけりをつけなければいけない。となれば、伊織が集中すべきは目の前の2人、ポニー・テールとツインテールの少女だ。そう思つて、目線を再び正面に向ける。

2人もやはり動いていた。ツインテールの明るそうな少女は、手に持つた杖を構え、目を閉じてなにやらブツブツと口元を動かしている。魔法の詠唱。おそらく伊織に向けてくるものだろう。もう一人、生真面目そうなポニー・テールの少女、史波は手に持つた薙刀を振り上げ、そのままこちらに駆け寄る。

（どうやら、2人の最初の狙いは自分らしい。

（まあ、それならそれで良いんだが……）

伊織は一旦そこで思考を止めなければならなかつた。田の前に、ボニー・テールが早くも薙刀を振り下ろさんと迫つている。その距離からして、そろそろ動き始めないと薙刀が直撃する。

「はあつー。」

威勢の良い掛け声と共に、薙刀が風を割くように振り下ろされた。無駄の無いその一撃は、風を切る音など伴わない。

逆に周囲の大気と風を味方につけ、スピードを増してやる。

「おつと、危ない」

軽くステップを踏みながら、伊織は自分に向けられた一撃をかわす。体を捻らせるその動きは決して素早いものではなく、むしろ戦闘ではスローモーションに近いような速さでしかない。しかしその動きが、空を切る史波の薙刀をじく当たり前になかわした。薙刀の切つ先が空を切つたのを見た史波は、驚きのあまり次の攻撃を一瞬止める。

（し、信じられません。あんなスピードの動きで、私の一撃をかわしてしまつなんて）

一応介具も持つていらない相手ということで、最初はそれなりに力を緩めての一撃だった。それでもあんな軽い動きでかわされるほど、スピードを落としたつもりは無い。そのうえ、目の前の男子生徒は涼しい顔、ヒヤリとさせる事さえできなかつた。

（少し、手を抜きすぎましたね）

反省した史波は、油断なく薙刀を構えたままチラリと後ろを振り返る。その視線の先で、杖を構えた陽菜がコクリと頷いた。

(ヒ)は、一旦陽菜さんにお任せしましょ(う)

そう思つた史波は地面を蹴り、その場から2・3歩サイドステップを踏む。伊織の目の前には、これまで史波の影に隠れて見えなかつた陽菜の姿が現れた。杖を構えた陽菜の口から、強い意志を込めた音節が紡ぎだされている。

「行くよつー」

言葉と共に、陽菜が杖先を伊織に向かつて突き出す。杖先が熱されたように赤く光ると同時に、オレンジ色の火球が飛び出した。しかも火球は1つではなく、まるで子どもの吹き出すシャボン玉のように見る見る数を増やしていく。

それらの火球全ては、カーブを描き伊織の四方八方に散つたかと思うと、こんどは全てが伊織の元へと向かつていた。

(へえ、これは凄いな)

伊織はまたも素直に感心した。たくさんの火の玉を生み出し、それを1つ1つ制御して相手を取り囲むという

この魔法は単に火を吹く魔法よりもはるかに難しい。どうやら田の前にいる陽菜と言う女子生徒、これまで出会つた

他の相手よりも魔法はできるらしい。しょうがないか、と伊織は心を決めた。この火球では、かわすのに骨が折れる。

それならば、こちらも魔法で防ぐのが一番だ。そう判断するやいなや、伊織は目を閉じて意識を集中させる。

魔法とはイメージの現出だ。頭の中で強くイメージした現象を、自分の中にある魔法の因子に載せて、そのまま外へと現す。そのためには、意識をしっかりと洗練させて、イメージを確かにしなければならない。その上で、それを言葉として再確認する。それが詠唱であり、これをもつて魔法はただのイメージから、魔法の因子に乗つて外へと開放され、術者の思い描く現象を見せる。

伊織がイメージを完成させた時には、もはや火球との距離はギリギリのところだった。それでも、伊織は間に合う事を確信し、力強い詠唱の言葉を口にしていく。

「世界を清めし水よ、汝凍てつく冷氣をはらみ、その輝ける壁にて
我を守りたまえ！」

詠唱が終えると同時に、伊織の右腕が目の前に突き出される。そして伊織の手の平から、透明な氷が一気にほどばしり、伊織自身の周りにドーム状に展開した。そこに、何十もの火球が打ち付けられる。その度ごとに火球は消え、氷の壁もシュー・シューという音と湯気を上げる。結局、炎の玉が全て当たると同時に氷のドームもそのほとんどが湯気になつていた。

立ち込める湯気の中に身を隠しながら、伊織は考える。

この2人、かなり出来る。魔法も、介具の使い方も、これまで佑に戦つてもらつた相手とは段違のだ。このまま戦つても、多分決着はつかない。とはい、2人に魔法を使うのだけは絶対にしたくない。伊織がそこまで考えを巡らせた時、白い湯気の向こう側から強力な意志のこめられた凜とした言霊が響いた。

「大気を駆け巡りし風よ、汝大地をさらい、その力にてこの地をはらいたまえ！」

周囲を強烈な風圧が包み込んでいく。その風は白い煙を一瞬で払いのけ、そこにいる人影をあらわにしていく。その場に突っ立った伊織、その10メートルほど横で魔法の詠唱を終え、薙刀を構えている史波、そして伊織の目の前、30メートルほど距離を置いて魔法の杖を構えた陽菜。3人はしばしの間お互いを睨み、動きを止める。

やつぱり強いな、と伊織は目の前の2人を改めて観察する。2人の戦い方は薙刀を持つ史波が近接戦闘で時間を稼ぎ、その間に詠唱を済ませた杖の陽菜が魔法で攻める、という2段構え。これ自体はごくありふれた戦い方であり、これまで伊織と佑が出会った相手でも使ってチームが結構いた。しかし、この2人はそのレベルが違う。史波の

近接戦闘にしろ、陽菜の魔法にしろそれ自体のレベルが他のチームより1枚も2枚も上手なのはもちろんのこと。それに加えて、2人の息がピッタリと合った攻撃は、ほとんど隙らしい隙を見せてくれない。さすがに伊織が防げないレベルには遠いが、それでもやつかいな事に変わりは無かつた。

まずい、と思い、伊織はチラリと道端の時計に視線を向ける。試験の残り時間はおよそ7分。

それからポケットの中についた競技用の機械にも目をやつた。表示された残り時間は、7分32秒である。

微妙な線だ。本来2つのチームが戦える時間は、およそ10分。

もしその時間が終わる前に試験 자체が終わってしまえば、2チームとも生き残つた事になり、商品も山分けとなる。だが問題はその逆、試験が終わる前に伊織たちと史波や陽菜たちの対戦時間が終わつた場合。こうなると両者失格となり、商品の購買タダ券はどうちらも手に入らない。伊織にしてみればタダ券などはどうでも良かったのだが、さすがにこれまで戦つてくれた佑の苦労を台無しにしてしまつのは気が引ける。

そう考えていた伊織の視界に、横から史波が駆け込んできた。

「ハアツ！」

気合の入つた掛け声と共に、今度は横に一閃、銀色の刀身が振るわれる。身をかわす代わりに、伊織はその場を蹴つて空中を5メートルほど飛び、その靴のつま先すれすれを銀色の刃物が薙ぎ払つた。

空中で体勢を立て直して着地。ここで1人と2人は初めてゆつくりと向き合つ。

「ずいぶん、余裕みたいですね」

ポニーテールの少女は、息を切らせながらも落ち着いた笑みを浮かべていた。

「そうでもない、さ。今の一撃だつてあぶなかつたし、それに」

伊織の目線が、今度はツインテールの少女に向かつ。

「さつきの火の玉も、相当す」かつたな

「え、あ、そ、その、ありがとう・・・・・ でいいのかな？」

田の前の相手にいきなり褒められて、少女はとぎまぎしたよう口ごもつた。再び、ポニーテールの少女が声をかける。

「そういえば、まだ自己紹介もしてませんでしたね」

「ああ、そういえば」

自己紹介、といういきなりの言葉に伊織は驚いたが、確かにそういわれればその通りでもある。伊織が妙に納得しているところに、史波が「ホン、と咳払いをして再び声をかけた。

「私は1年3課の周防 史波です。以後、お見知りおきを」

そう言つて頭を下げる史波。すると今度はそれにつられ、隣の陽菜がペコリと頭を下げながら言つ。

「わ、私は史波ちゃんと同じ3課の高畠 陽菜。よろしくね」

自己紹介なんて、およそ戦う場合に似つかわしくないが、それでも相手がしてくれた以上こちらもしなきやな。
そう思つて伊織もゆっくりと唇を開いた。

「天城 伊織、2人と同じ1年3課だ」

「い、1年3課ですか！？」

その言葉の中の、1年3課、と言つ部分に陽菜と史波は眼を丸くする。

「と言つ事は、朝の教室でもう会つてたんですね」

「ああ、悪かつたな、気付かなくて」

「いえ、お互こなまでしょ！」

そう言つて、3人は軽く笑顔をかわした。殺伐とした戦闘の最中の、和やかなムード。しかしそれが長続きするはずは無い訳で・・・・

「おやおや、そつちは随分仲良しみたいですね」

突然後ろから聞こえた恨みがましそうな声に伊織が振り向くと、そこにはいつの間にやら佑が立っている。息を切らしながら額を白衣の袖で軽く拭うその姿に、伊織は多少の驚きを込めて尋ねた。

「さすがに苦戦してるか？」

「ええ、ええ、旦那と違つて、そつちは問答無用に戦つてますからね。」うやつて旦那と話していくも・・・・

普段より五割増しくらいに皮肉めいた口調で佑がなおも言いかけたとき、そのままの前に1枚の白いヒラヒラとした紙切れが飛んでくる。その白い紙切れの正体を認識するかしないかのつり、

伊織と佑がその場から飛びずさつた。

一瞬の後、紙切れは元々2人の立っていた場所でクシャッとひしやげ、丸まつたその中心から弾け飛ぶように空気の塊が飛び出る。コンクリートの上では強風が吹けども砂埃は立たなかつたが、その代わり道の両脇に植えられた木の枝がしばしそうと軋むように揺れた。

伊織が紙人形の飛んできた先に目をやると、そこには案の定、和服を身にまとつた優雅な少女の姿がある。

その眼から鋭い眼光が覗き、こちらを油断なく見据える様は錦の織物に包まつた鋭利な日本刀を思わせた。

「ほらね、油断も隙もあつたもんじゃないでしょ？」

「確かにそつだが、どうする？ 少し助けるか？」

「いえ、ご心配には及びませんよ。1人なら何とでもなりますぜ」

頼もしい言葉で答える佑だつたが、その額には汗がにじみ、息も相当上がつてゐる。伊織は見抜いていた。これまでの戦いを全て1人でこなしてきた佑に、もはや体力や魔力はわずかしか残つていらない。おまけに相手は式紙を使うかなりのやり手だ。佑が負けるとは思えないが、相当の苦戦を強いられたとしても不思議は無い。

再び、視線をこれまで自分が戦つていた2人に戻す。史波とか言う薙刀少女、陽菜と言うツインテールの少女。実際に戦つて、その実力が良く分かつた。2人ともおそらくはこの学校でもトップクラスの使い手に違ひない。

しかしそれを認識した上でなお、伊織にはこの状況を一瞬で終わらせる自信があった。ただし、その方法にはリスクが伴う。佑にも、以前からきつく注意されていた。「あの能力」は使つな、と。

(佑、心配してくれてるお前には悪いこと思つてゐる)

しかしだからこそ、自分をここまで心配してくれる佑のためにこそ、自分の力を使うんじゃないのだろうか？
せめて最後くらいは自分が佑を助けたくは無いのか？ 佑の言葉に甘えて、このままずっと力を使う事から逃げ続ける。そうしていく、一体自分は何の役に立つ？

そして、どうやって「あいつ」を乗り越えられる？

(でも佑、魔法を、怖がってなんかいられない。そりだろ？)

伊織は決意した。「あれ」を使い、勝負を一瞬で決める。そのためにまずは、隣にいる佑の注意を自分から逸らすことだ。

「佑、悪いがもうじばらへ、南御寺の相手を頼めるか？」

「言われなくともしますよ。旦那は旦那で、結構大変なんでしょう？」

「……・悪いな」

「なあ～」、元

そう言つて、佑は再び地面を蹴つて自分の対する南御寺の方に向

かつていつた。伊織の言つ「悪い」に含まれた意味を、知らされずに。

「さて、と」

伊織は、2人に向き直つた。もはや、お互に名前を名乗つていた時とは違つ。史波は再びその刀身を振り上げ、陽菜はその杖を胸の前にかざして詠唱に入つていた。緊張しきつた空氣、3人がにらみ合つ中で、史波が伊織に声をかける。

「お友達さんとのお話は、よろしいのですか？」

「ああ、中断させて悪かつたな」

そう言つて、伊織はゆつくりと瞼を閉じた。先ほどの氷の壁を作つた時は逆に、体の魔力をイメージに乗せ、それを吸い上げるように眼から頭にかけて集め、そこから再び全身へと拡散させていく。

「それともう一つ、今のうちに謝つておきたいんだけど」

眼を閉じたまま、伊織はゆつくりと弦くよつに田の前の2人への謝罪を口にする。

「もつ、この戦いは終わりだな。きっと」

瞼を上げた伊織が見たのは、伊織の言葉に身構えた2人だった。その射抜くような目線は、今の伊織には辛いものだった。

それに、今「あの力」を使いながらこつしている事だけで、精神を保つのが難しい。とにかく、早くケリをつけなければ

いけないのだ。

2人に向かい、伊織はゆっくりと歩き出した。手をかざすでも、武器を取り出すでも、魔法の詠唱をするでもない。目線を俯けて、ただ一步一歩2の方に近づいてくる。

陽菜と史波は、不気味なその歩みにひるみながらも、かといって何もしないでいる訳にはいかない。先ほどと同じ、また史波が薙刀を体の横にひきつけ、一気に駆け出した。

（舐めてもらつては、困ります！）

先ほどの身のこなし、もう介具を持つていらないなどと言つてはいる場合ではない。さすがに薙刀の本物の刃を使うのはご法度だつたが、今度の一撃には絶対の自信があつた。

（いくら彼でも、この魔力の刃は避けられないでしょうね）

史波は先ほど、伊織と佑の話していた隙に薙刀に魔法を施していった。薙刀の柄の途中から何本も半透明なサファイア色の棒のようなものが突き出している。これこそ史波の秘策、魔力の刃だ。先ほどのように本物の刃をかわそうとすれば、逆にこの風の魔力が直撃して強烈な打撃となる。

これを避けるには、大きく横か後ろに跳ぶか、介具や魔法で直接止めるかしかない。介具も持たず、詠唱もしていない

今の伊織に後者が出来る可能性はゼロ。とすれば、ありえるのは前者のみ。だがそれは無駄なことで、この魔力の刃は単に薙刀についているだけではなく、振り下ろした瞬間に自分の意識した方向へと跳んでいくのだ。先ほど陽菜の火の玉を

かわした伊織ではあつたが、ここまで至近距離、しかも炎より早い風の追撃を受ければ、直撃の前に魔法を唱えることなど出来ない。

「えー、この一撃はどうあってもかわせない。それが史波の計算だった。」

「やあつー！」

最初の一撃、思ったとおり伊織は後ろに跳んだ。すかさず史波は意識を集中させ、風の刃を飛ばす。青緑色の空気の塊は一つに集まり、伊織へと矢のように向かっていく。史波が勝利を確信した、その時だった。

伊織の体が、横に捻られる。いや、捻られていたのだ。まるで自分のところに刃が飛んでくる、それを分かっていたようだ。史波も必死に風の刃の軌道を変えようとするが、風のスピードは史波自身の制御を超えて速かつた。風の刃は伊織の横をむなしく通り過ぎ、そのままやや上向きの軌道を変えずに1秒ほど飛んだ後、空中に消えていく。

（そんな・・・・・！）

有り得なかつた。風の刃のスピードは、人間の反応できるレベルではない。眼で見て、脳が分析し、その結果として筋肉に電気信号で指示を送り、最後に体が動く。魔法家が身体能力を強化しても、史波の風の刃を切り抜けるのは難しい。それこそ、この学園の教師やらプロの戦闘魔法家やらでもなれば不可能であつて、まして新入生がそんなレベルに達しているわけが無い。

ならば、なぜかわされたのか？　目の前で着地した伊織を見て、史波はそれが現実の事とは思えなかつた。今度はゆっくりと史波の方に歩き出した伊織。まずい、と思うより早く、史波は薙刀を構えて再び伊織に駆け出す。伊織は、またしても何の反応も見せない。先ほどのように魔法はないが、これならいけるかもしない。

薙刀を振りかぶつた時には確かにあつた史波の希望は、それを振り切る前に、両手にかかる異常な重みでうち消えた。

あまりに一瞬の事なので、史波にも分からなかつた。だが自分の目で見た一瞬の光景を信ずるならば、自分の振り下ろした薙刀に、横から伊織が回し蹴りを叩き込んでいた。そしてそれを裏付けるように、今まさに史波の薙刀その手を離れ、弧を描いてゆっくりと飛んでいく。

目線を再び伊織に戻すと、ちょうどその足が一回転して再び地面に戻ってきた所だった。一瞬交錯したその瞳。そこには、喜びも軽蔑もなく、ただものを見るための人間の一部、物質の塊としての乾燥した色があつた。その目のままで、伊織はゆっくりと身を守る介具を失つた史波の方に近づいてくる。

「史波ちゃん！」

史波が振り向くと、その先には杖を構えた陽菜がいる。このままでは、史波ちゃんがやられちゃう。何か、何かしなきや。

そう思つた陽菜は、今しがた完成させた魔法を開放すべく、杖を伊織の方へと勢いよく突き出す。今しがた史波の魔法をかわした伊織にかわされない保証はないが、それでも魔法を使わずにいられなかつた。

「これで、どうつー?」

杖の先が再びオレンジ色の光を纏い、炎があふれ出す。先ほどと違つたのは、その炎が無数の火球ではなく、幾筋かの太い縄のようになつて向かつていつたこと。焼け付くような光と、燃え盛る轟音と、灼熱とが束になつて伊織を襲い、飲み込まんとする。

それを見ても、伊織は魔法を使わなかつた。した事といえばやや大げさなステップを踏んでフォーアクダンスのように体の位置をクルクルと変えたこと、そして、時折上半身を大きく曲げ、捻り、かがめたこと。それだけだつた。しかしそれだけの動きしか見せない伊織に、陽菜は絶句させられる。

(う、嘘、だよね?)

たつたこれだけで、伊織に襲い掛かろうとしていた炎の筋は全て地面へと流れ落ちていき、炎が地面にぶつかった時に弾け跳ぶ火の粉さえも伊織には当たらない。伊織が10歩ほどのステップを踏むうちに、炎の筋は全て外れており、更に、丁寧な事に伊織は再び史波の前に立つてはいる。視線は相変わらず俯いたままであつたが、その手をゆっくりと差し伸べながら、若干荒げた息と共に呴く。

「機械を、渡してくれないか?」

その力に、史波は固まつていた。目の前にいるのは、自分達のレベルをはるかに超えた、不気味なまでの力を持つた生徒。同級生なんて信じられないほどに、強力な相手。これは試験で、伊

織が自分達を殺すわけではない。まして目の前の伊織はこれまで何一つ攻撃していない。自分達の魔法や介具をかわしているだけなのに、その実力に何も出来ない。

伊織の手が、ゆっくりとこちらに近づいてくる。史波はそれでもその眼を見るしかなかった。ゆっくりと、ゆっくりと近づいてきたその手は、しかし、途中で軌道を変えて、そして・・・

「え、天城さん・・・・・・?」

「嘘・・・・・・?」

史波と陽菜が見つめるその前で、伊織はコンクリートの地面にガックリとひざを突き、更に、そのままゆっくりと体を右の方に傾け、最後にはうつ伏せで倒れこんだ。

第6話 抜き打ち試験（6）（後書き）

大変更新遅れてしまい、申し訳ございませんでした。第6話更新です。

今回で長かった抜き打ち試験編も終わり、次回からはもう少しテンポが良くなるかと思います。さすがに1時間半の出来事を6話と言うのはひどすぎるるので……

その次回ですが、正直更新の前途が立つておりません。それでも、何とか時間を見つけて書いてまいりますので、お暇な時にでも読みに来ていただければと思います。

第7話 試験後のひと時（1）

疲れて夢を見る時、氣を失っている時、いつも思い出す。あの日、何が起こったのか。

分かりきっているはずの事なのに、またしても伊織の脳がそれを強制的に甦らせる。

その思い出したくも無い思い出が、恐ろしく明確な映像と音声で日の前に現れる。

あの男は、何気ない日常の会話と変わらない口調で言つた。「俺と共に来い」と。

伊織がそれを拒んだ瞬間、男がためらいもなく自分に刃を向いた。

訳が分からなかつた。けれどそれ以上に、怖かつた。恐怖に駆り立てられ、自分は無我夢中で抵抗して、逃げようとした。

そこに「母」が現れ、伊織を守りつゝ必死で駆け寄つた。けれどその一歩一歩は、死へと急ぐことに等しいもの。男は母を、チラと視界に入れただけで、あとは何のためらいもなく光と炎に包み込んだ。母の悲鳴、男の薄ら笑い。

そして、このとき初めて、伊織は自分を守ることではなく、男を殺す事を考えた。

彼は男に立ち向かつた。勝てるはずも無い戦いを、戦つて、戦つて。あが本当に

男と全力でやりあえたのか、それとも男が手を抜いていただけなのか、それは分からぬ。

確かなのは、最後に男が自ら去つていった事だけ。去り際に、期待に瞳を輝かせながら、

自分にこう言い残して。

「3年後の今日、お前を必ず連れて行く」

これが、伊織の聞いた「父」の最後の言葉である。

あの日、大切なものを失い、おぞましいものを手にしたその瞬間から、伊織に2つの

感情が芽生えた。父を殺す事を求め、そのための力を求めようとする感情。そして

その父の血を引くことを恐れ、自ら魔法を捨てようとする感情。

最初はそれらの感情が入り混じり、魔法を使えなかつた。月日が経つにしたがつて、

伊織は魔法を以前より相当マシに使えるようになった。しかしそれは、同時に彼が父へと

近づいていく過程を意味する。

その事実に触れた時、伊織は何も分からなくなり、何も出来なくなる。そう、先ほど、

抜き打ち試験の最中に地面に倒れてしまったよつこ。

（倒れ、た・・・・・・？）

いつもの様に始まつた悪夢は、こうしていつもの様に、終わるつとしていた。

ゆつくりと意識が鮮明になり、瞼をゆつくりと上げる。その眼が見上げていたのは、白一色の天井だった。次に甦つたのは音である。最初は、単純な音声にしか認識できなかつたものが、やがて意味ある言葉として、はつきりと頭の中で理解できる。

「…………」とは、彼は魔法や介具で何かされた訳じゃないのね？」

「ええ、全く何も」

「そう。まあ外傷も無いし特に変わつた所も無いから大丈夫だとは思うけど。一応気を

つけて見てはおくわ。目が覚めたら、本人が特に辛そうでなければクラスに返すつもり

だから、先生にも伝えておいてくださいね？」

「分かりました。わざわざどうも」

2人の会話を小耳に挟みながら、伊織はゆつくりと上体を起こして辺りを見渡してみた。

自分の周りをぐるりと取り囲む、天井と同じ真っ白のカーテン。自

分の横たわっている

少し固いベッド。カーテンの向こうに、声の主である2人の人影。

これは、本当に自分が病院まで運ばれたんじゃないか？

（まことに。『あれ』を使って病院行きたかったとしたら、佑になんて言われるか）

「あれ」の使用は前々から佑に止められていた。それを破つてみた結果が、病院のベッドで横になっている今の自分である。普段は飄々とした態度を崩さず、怒るどころか苛立ちさえも滅多に見せない佑であったが、いかんせんこの件になるとかなり手厳しい。

これは今のうちに少しでも言い訳を考えた方が良さそうだ。

「おや？ もう気付かれたんですか？」

「なつ！？」

伊織がこれから対応策を考えようとしたまさにその時、これ以上は無いというほどのベストタイミングで周りのカーテンが開いた。そこにいつもと同じ笑みを絶やさず、白衣がやけにこの病院らしき場所に似合つ佑が立っている。

「旦那、もう大丈夫ですか？」

「ああ、すまんな」

「いえいえ、気にしてませんよ。気にしてなんか、ね」

「これはまずい。口で気にしていなことは言ひながらも、佑の笑顔には明らかに

無言の圧力が伴っていた。「ここは何とかして、話題を変えてみなければいけない。

決心した伊織は、努めて何も気にしていないうつた口調で答える。

「それはもうとして佑、ここはどこかの病院か？」

「病院？　ああなるほど。まあ確かにそつ見えなくも無いですが、ちょっと

違いますかね」

言ひながら、佑は伊織の回りに架かっていたカーテンを開け放す。視界が

開けて見えたのは、伊織のものと同じようなカーテンのついたベッド。そして、

それぞれに寝かされた生徒たち。伊織がいる部屋にはベッドが10台ほど置かれており、カーテンが閉まっているものを覗けばその全てに生徒が寝かされている。

更に伊織の斜め向かいのベッドには白衣を着た若い女性の姿があった。

察するここの女医さん、だろつか？

しかし改めて見渡しても、ここの部屋は病院にしか見えない。少なくとも、

病院以外でこんなにベッドがあり、白衣を着た女医がウロウロしている場所を伊織は知らなかつた。

「佑、病院じゃないんなら、こゝは一体……」

「まあまあ、とつあえずベッドから出ましょひ。わのひに分かれますよ。

ああ、靴はそつちにあります」

そう言つて佑は質問に答える代わつて、向いのベッドで生徒の様子を見ていた
女医の方に向かい、なにやら話し始めた。なんだか納得行かない氣もするが、確かに佑の言つとおり、こゝでベッドの上に寝ていてもビツビツもない。
ベッドから

起き上がり、佑に言われた靴を履く。それからふと想に立つて、自分でベッドの毛布を綺麗に敷き直し、枕の位置も直した。

「ああ君、ありがとう」

枕をポンとシーツの上に置きなおした所で、後ろから女医さんが声をかける。

「今はみんな忙しいから、直してくれると助かるわ」

女医さんの言葉に「じつも」と軽く会釈を返した所で、今度は彼女と話を終えた
佑が戻ってきた。

「んじゃ、出ましょうか」

そう言つて先に歩き始めた佑の後を歩き、伊織は部屋を出る。部屋を出ると、

これまた病院さながらの廊下が続いており、生徒やら白衣の大入たちやり、時折

スース姿のおじさんの歩く姿も田に付く。途中には先ほどのような病室、そして

倉庫らしき場所の頑丈な扉、診察台の置かれた空き部屋が続いた。

「佑、ここは一体？」

「そろそろ出ますよ。さつすりや、全部分かりますつて」

わき田も降らずにスタッタと歩く佑は、そのまま大きなエントラントホールを

突つ切り、外へと出る正面の大きな自動ドアを抜けた。その先にはコンクリート舗装の道。

ドアを抜け建物の外に出た所で佑は止まり、クルリと伊織の方に振り返る。

「旦那、ここからだと良く見えますぜ」

そう言われて伊織が振り返ると、自分がこれまでいた建物が分かる。白塗りの壁が光を

反射するその建物は、5階建ての高さに加え、端から端まで何メートルあるのかと言つ幅の広さを持つ、巨大な建物だった。そしてその脇、先ほど2人の出てきた扉の横に、大理石を

掘り込んで文字が書かれていた。

医療センター

「旦那、パンフレットで見ませんでしたかい？　この学校は保健室の代わりに下手な病院以上の医療センターを抱えてるって。それがここです。もちろん実際見たのは

オイラも今日が始めてなんですけどね」

佑の説明を聞きながら、伊織は改めてこの保健センターとやらを見る。この学校の施設がどれも規格外なのには入学1日目にして早くも慣れ始めたが、それにしてもここはまた規格外の度合いが頭一つ抜けている感じだ。はつきり言って、これは都心の総合病院ではあっても、学校の保健施設ではない。それほどに大きく、本格的だつた。

「なんだろうな、この学校は」

試験の疲れ、寝起きの氣だるさ、施設1つ1つの規格外の規模への嘆息、その他もうもうを込めて伊織は大きく溜め息をついた。

「さて、旦那。そろそろ教室に戻りましょうぜ。今から帰れば、まだ放課後になる前にギリギリ帰れますぜ」

後ろから声をかけられ、伊織は再び佑と共に歩き始めた。と言つ

ても、校舎は伊織たちの目の前、道を真っ直ぐ行ったところにもう見えていたから、一直線に歩くだけなのだが。

(まあ、こういう時は大きい校舎つてのが便利なんだけだ)

そんな事を思いながらしばし歩いていた伊織の目の前で、突然、佑がその歩みを止めた。

「佑、どうした？ 何かあった……？」

声をかけた所で、伊織の体は凍りついた。伊織の言葉に振り返った佑の、メガネ越しに見えたその瞳は、普通の人間のそれではない。その色は、貴金属にも似た光を跳ね返す金属光沢。先ほどの試験でも、この眼によつて何人の生徒が脱落した事だろう。

その眼が今、自分に向けられていた。その鏡のよつな眼に阻まれて、伊織は指一本動かせない。

(何で、佑が縛瞳を?)
(バインド・アイ)

伊織は混乱していた。むしろ恐怖に近かつたかもしだい。佑がこれに向けるのは、先ほどの試験のように特殊な場合を除けば、怒りがある点を吹っ切つた時だけだ。

生まれた時に偶然、もしくはその保有者からの遺伝によつて発現

し、一般的の魔法とは

明らかに違う特徴を持つ特殊魔法。これを通称「オーパーツ・アビリティ」と言つ。

そのうちの1系統である「不思議な瞳 ワンダー・アイ」の、更にその中の1つがこの縛瞳バインド・アイである。

「不思議な瞳 ワンダー・アイ」の特徴は相手に目と意識を合わせただけで、本来魔法の発動には必要不可欠な魔法の詠唱を全く行なわずに力が発動する点にある。

バインド・アイもその例に漏れず、鎖や縄のような物質も、催眠術のような暗示も無しに、眼を合わせた相手を拘束する。やえにそのバインド・アイに捕まつた伊織は、地面の上で文字通り棒立ちとなつていた。

「旦那、もう一度はつきりさせねえきますが」

向き直つて、伊織の方を見つめる佑の顔は、笑つていた。けれどそれは、もはや普段の笑いなどでは無い。そこにあつたのは冷徹さと静かな怒り。仮にその目がバインド・アイで無かつたとしても、普通の人間ならばたじろぐが、後ずさるか、いずれにしろ何の反応も無しではいられないだろう。

「さつき、オイラが眼を離した隙に、使いましたね？」
「零時間反射ゼロ・リフレクス」

穏やかな、しかし脅迫するような、佑はそんな一律背^{アキ}の声質でじつとりと伊織を詰問する。

同時に、その瞳の色はカメレオンの体色の様に黒と深茶色へと変色し、伊織は再び全身を動かせるようになった。

「それは……」

「確かに、あれを使えば勝てたかもしれないですねえ」

伊織の言い訳を無視して、佑は一人誰にとも無く語り始める。

「ゼロ・リフレクス。人間が周囲を知覚してから、それを脳に送つて処理し、さらに筋肉に指令を送つて反応する。それら全てを司る電気信号が伝わるのにかかる時間を、限りなくゼロにする。

世界で旦那しか持たないオーパーツ・アビリティ、その二つの内の一つ」

独白しながらも、その眼は決して伊織の視線を離さなかった。まるでその一言一言を

伊織に強く認識させるかのようだ、説明口調の佑の演説は淡々と続いている。

「まあ、そうなつてしまえば相手の動きも止まつていいようなものですし、反応も

ほぼ未来予知になりますからねえ。あの薙刀の子なんて良いカモでしょう？」切りかかった

瞬間にはかわされ始めてるんですから、当たるはずがありません。もつとも、それ無しでも

曰那の身体能力と魔法なら、かわせるでしょ」が

「…………

「しかし、曰那にオイワは言いました。それを使つと、曰那の精神に悪い影響を与えると。

曰那はとつて『あの事件』を思つて出させかねないと

「佑、でもそれじゃあ俺はずつと…………

「ずつと魔法を使えなこまま、ですか？」

伊織の言葉を全て見透かしていたかのよつた佑の言葉に、伊織はまたも反撃の機会を失つた。

「確かに、いつかは慣らさなければいけないとは思つます。しかし、まだ早すぎる。曰那が

一番よく分かつてゐるでしょ？今の曰那は、まだ…………

ここに来て、佑は一瞬だけためらつ表情を見せ、その言葉に間が生まれる。だが、それはあくまで一瞬に過ぎなかつた。

「まだ、事件を引きずつてゐます。だから魔法を使う」と、それ自体への恐怖が抜けていないんですよ。そんな精神状態で魔法を使うのは、危なすぎますね

佑の言葉に、頷きもせず、否定もせず、言葉も返さず、伊織はただ黙つて耳を傾けていた。

そのことは、自分が一番良く分かっている。現にほんの数分前にも、その「記憶」が甦つたばかりだった。佑の言ひ「とは、あまりに正論である。

急に、先ほど後先を考えばかった自分が愚かしく思えてきた。

「分かった。これからは氣をつけよう、主治医の言つけだしな」
「ま、とりあえずもう教室に戻りましょ。それより、旦那にこの眼を使ってしまいまして、失礼しました」

「そんなのは良い。謝るのは俺の方だよ。心配かけて、すまなかつた」

お互に謝った後、再び2人は学園に向かって歩き出した。歩く順番は逆転して、伊織に佑がついていく形である。

晴れ渡る空の日差しこそ、そろそろ夕日の面影が混じっていた。

「はい、じゃあ今日は抜き打ち試験お疲れさま。みんな気をつけて帰るようになつ！」

朝と変わらず、子どもっぽくて威厳の欠片も無い担任の挨拶。教室の生徒たちはやつと波乱に満ちた登校初日から解放されて、思い思いに解散し始めた。

今日は、疲れたな。と考えつつ、机からカバンに連絡の書類を詰め込む伊織もその中の1人である。保健室から遅れて帰ってきたばかりに、机の中に入れられた大量の紙

しかも名刺サイズから折りたたまないとカバンに入りきらないものまでがごちゃ混ぜだった。それをカバンの中に収納する、という面倒が回ってきてしまった。

しかも本来なら教室で聞けたはずのプリントについての説明が途中からだつた分、家に帰つて改めてこれらを読まなくてはいけない、という頭脳労働までサービスされている。それもこれも、先ほどの試験の後、自分が数時間のんきに眠つていたからなのだが。

ちなみに、2人が教室に戻つた時には8割方の生徒が戻つていた。そこから今現在まで30分ほどの間に5、6人が追加で戻り、結局最後まで戻らなかつた生徒は10人弱。

とはいえ橋先生が医療センターに直接書類を渡していく、と言つて
いたから、大ケガの
生徒は出なかつたのだろう。

（俺はともかく、付き合わせた佑には悪いことしたな）

もう一度謝つておひづ。そう思つた伊織はカバンに紙束を入れる
作業をしつつ、
佑のいた机の方に目を・・・・・

「旦那、帰りましようか？」

探す手間が省けたようだ。主人が必要と感じた時にはもうそこには
いるベテラン執事
ようじく、伊織の前にはとづくにカバンを肩にかけた佑が控えてい
る。

「ずいぶん早かつたな」

「ええ、まあ適当にカバンの中に詰め込んだきましたからね」

相変わらず要領の良いやつだ、と思いつながら、伊織もよつやく全
てのプリントを
カバンの中にしまい込む。その最後のプリントをカバンに入れたの
と同時に、
佑とは別の方から、別の声質が聞こえた。

「て、天城くん？ 薬生くん？」

2人を呼ぶ声に振り返ると、そこにはつこさつき出会い、あまつ

さえ魔法のドンパチを

やらかしたばかりの女子生徒が2人、こちらに視線を向けていた。

「確かにさつきの試験で会った?」

「うん。高富陽菜と周防史波。天城くんが倒れた時は、びっくりしたんだよ。もう、大丈夫?」

「心配ない、保健センターのベッドでしばらく休んだから。2人と
も、さつきは驚かせ
ちゃったな。変な心配かけて、ごめん」

「ううん、大丈夫なら良かつた。ホッとしたよ」

「大事になつていたらどうしようかと考えていた所でしたから、そ
う聞いてホッとしました」

謝罪の言葉を口にする伊織に、陽菜と史波は表情を緩めて応えて
くれる。そんな2人の
喜ぶ顔に、伊織は内心で驚いていた。先ほどまで戦っていた相手、
圧倒的な力で2人を
追い詰めたはずの相手である伊織を避けるどころか、心配し、その
無事を喜んでくれた
2人。その心の温かさに、である。

「高富さんも、周防さんも、わざわざありがとうございました。本当、心配させ
てたから」

そう言つて頭を下げる伊織。そのかしげまつた様子に少々慌てな

がら、陽菜が

「そりそり」と話を切り出した。

「それでね、2人にお話したいのは、これがあるからな」

陽菜の手から差し出されたのは、なにやら何枚かずつ束になつたチケットらしきものであつた。何気なく、一番上の一枚を見てみるとそこには「生協・購買100円券」の

文字と、この学園の判子。

「ええっとね、天城くんが倒れて、薬生くんが天城くんの様子を見てるうちに試験が

終わつたの。それで、結局天城くんと薬生くんも最後まで残つたグループになつたから、

最初に言つてた購買のタダ券がもらえることになつたんだって」

「それで、さきほど私達にその券が配られた時、先生からお2人に渡すよう言われていまして。

100円の券が8枚、1人800円分になつてていると思いますから、数えてみてください」

そう言いながら差し出される購買券の束を、2人はしばらく見ていた。一瞬の間に後に

まずは佑が、差し出されたチケットを受け取る。

「これはこれは、わざわざびつも。ま、儲けものは頂いておきましょうか」

一方の伊織も、しばらくして差し出された束を受け取つた。だが、

受け取った券のうち、

すぐに何枚かを抜き出し、それを2枚ずつ4つに分けたかと思いつと、
今度は逆にそれぞれの
束を陽菜と史波に差し出す。

「これ、2人がもらつて

「えつ？」

「も、もらつて、ですか？」

陽菜と史波は、突然手渡された2枚ずつの券に困惑した表情を見
せる。だが伊織は券を
再び戻そうとはしない。2人に向かって、券を持った手を差し出し
たままだ。

「佑はともかく、俺は倒れた時点で本来失格になつてたんだよ。そ
れがたまたま券まで

もらつちゃつたけど、何だかもらうのが申し訳なくてさ。だつた
ら、一緒にやつて

くれた佑、それと最後に迷惑かけたチームの3人に貰つてもらお
うと思つて

「そ、そんなのいいよ！ 私達、何かしたわけじゃないんだから」

「そうです。それに、あの試合が続いていれば完全に私達の負けで
したから、貰つことなんて」

丁重にお断りする2人。しかし、伊織はなおもきつぱりとした口
調で言い切る。

「良いんだよ。じつせんまつ購買とかに行く事も無いし、お金も困つてゐるわけじゃないか」

「や、それは私だつてやうだよ。何も渡すことなんてないよ」

「や、そうです。その券を貰つたのはあなたなんですから、遠慮する」とはありますか?

「でも、それじゃ…」

「ねえ、じめじめしな…」

食事下がるつとする伊織に、陽菜が割つて入つた。

「その券はやつぱり伊織くんがもうつて欲しいの。やの代わつ、これから私たちが何か困つたことがあつたら、今回のことでも何か助けてくれる。それじゃ、だめ?」

申し出と共に、両手を合わせて頼み込む陽菜。更に隣にいた史波も「そうですわ、伊織は私もそういうことがありますか?」と同意する。やの申し出に、伊織はなおも言いかけた口を開じ、

一瞬考えた後

「分かった。それで良いよ。その代わり、何か出来ることがあつたら遠慮なく言つて」

「うん… お願ひするよ」

「伊織さんなら、いやと云つと頼りになると思いますから」

そう言つて笑顔になる2人を前に、伊織が佑の方にチケットを渡そうとする

「旦那」

逆に佑から声がかかった。

「オイラは、ちょっとトイレに行つてきますよ」

「ああ、悪いな待たせちゃって。佑にもこれを・・・・」

「いえいえ、購買の券はいりません。オイラのは、さつき旦那にきつい事を言つた、お詫びに
でもして下さい」

そう言つて、佑は1人教室を出ていった。またしても渡しそびれてしまつたようである。

仕方ない、せめて4人目だ。そう思つた伊織は、再び陽菜と史波のほうに向き直つた。

「申し訳ないついでなんだけど、さつき一緒にいたもう1人つて、何組の人か分かる？」

券を手渡しに行こうつて思つたんだけど

「あ、それなら大丈夫だよ」

伊織の疑問に、これまた楽しそうな様子で陽菜が答えた。

「彩人くんとは、今日一緒に帰ろうと思つてたから約束してるので。その時一緒に会いにいこうよ」

陽菜の申し出は、伊織にとつて予想外ではあつたが、同時に嬉しくもある。なにせ南御寺家のもう1人と戦つていたのは佑の方だったのだ。だから伊織が探そうにも顔が良く分からぬし、それ以上に向こうもこちらの事が良く分からぬ。そんな相手に「購買の券を渡したいんだけど・・・・」では、さすがに無理があるとこつものであらう。

「そつか、じやあまたお言葉に甘えちゃうけどお願ひするよ」と声をかける。

「あの事は先に言つておいた方がいいと思います。ほら、彩人さんの」

「あつ、そつだつたね。普通だつたら驚いちゃうもん」

そう言つて、2人が頷きあつた後、史波の方が真剣な表情となつて伊織に向き直つた。

「天城さん。ひょつとしたら信じただけないかもせんが、あの私たちと一緒にいたもう1人は、その」

「南御寺家の入つて事は、佑から聞いてるけど」

「あ、あれ？ ご存知だったんですか？」

「まあ、一応佑から聞いてたからな」

伊織の意外な言葉に、史波は驚いた表情を見せる。さすがにあの短い激戦で、彩人が使つたのが「式紙」ということまでは気付かないだろう、と思つていたからだ。

「そうですか。では、話は短くて済みますね。彩人さんに南御寺家の人だ、と言うことをあまり言わないであげてください。気にしていらっしゃるようなので」

「ああ、分かつた」

「まあ、伊織さんなら大丈夫だとは思いましたが、一応心に留めておいてください」

真面目な表情になつた史波に答える伊織。もつとも、彼にとつてそれは当たり前のことではあつた。

なにせ、自分が今もそれを背負つているのだから。

「そ、それとね、天城くん」

伊織が苦い思い出を思い返しかけた所で、遠慮がちな陽菜の声に現実へと引き戻される。

「…」、こつちは大したことじゃないんだけどね、その、彩人くんは…

遠慮がちな態度を続ける陽菜は、やがてゆっくりと口を開いた。

「ああ見えて、男の子、なの」

第7話 試験後のひと時（1）（後書き）

皆さま、大変お久しぶりです。作者の治部醤油で「」ります。

およそ1年、私事で執筆を中断しておりましたこと、まずはお詫び申し上げます。やっと小説を書き始める日処が見えましたので、再び執筆を始めることとなりました。

とはいって、1年という長い中断を挟んでの再執筆ですので、気持ちを新たに、またゼロから書くことに向き合いたいと思いつますので、よろしくお願ひいたします。

次回投稿は、1週間後を予定しています。何とかストーリーも本筋に乗せていきたいと思いますので、ご期待ください。

第8話 試験後のひと時（2）

「…………天城くん、さつき言つたとおり、彩人くんは男の子だからね。見た目に騙されちゃダメだよ」

1年3課の教室を出た3人はその2つ隣り、1年1課の教室に向かつた。

史波が教室の中に彩人を呼びに行き、伊織と陽菜は教室の前で2人を待つ。

「大丈夫。試験の時に一緒にいた人でしょ？ 一度見たから分かつてる」

「うん、でももう一度田の前で見たら、きっと見とれるんじゃないかなあ？」

いたずらっぽい表情でからかう陽菜の言葉を、伊織は正直なところ本気に

していなかつた。先ほどの試験で陽菜、史波と一緒にいる彩人を見た時は、確かに

女子だと思っていた。

しかし、彩人と手合わせしたのは佑だつた上、自分は途中で倒れこんでしまつた。

だから、実を言つと彩人の顔もあまりよく覚えていない。

だがそれにしたつて、男は男だ。どんなに見た目が美しくても、さすがに男だと

分かつている相手に見とれるほど変な趣味は無い。そう内心で突つ込んでいた
伊織の前に、教室から2人の生徒がやつて來た。

「天城さん、お待たせいたしました」

2人に向かつて声をかけたのは、教室から出てきた史波であった。
しかし伊織の
目が史波に向けられたのも束の間、ほんの数秒後には、その目は彼
女の後ろについて来る
もう1人に釘付けとなつた。

「こちらが、南御寺彩人くんです」

和服の紋付のような黒い羽織りの下には、控えめながら品の良さ
を感じるこれまた
和服の小袖。その腰に挿した刀の柄も、長い黒髪も相まって、可憐
で優い姫君、といった
ところだろうか。史波の言葉によれば目の前の彼女が、いや彼が、
誰あらう南御寺彩人
であるらしい。先ほどまでは余裕のあつた伊織も、その姿に一瞬我
を忘れて見入つてしまつ。

綺麗だ。それ以外の言葉が見つからぬくらい、見事な美しさで
ある。

「クスクス、やつぱり・・・・・・」

目の前の見少女、もとい美男子に見とれていた伊織を現実に引き
戻したのは、隣にいた

陽菜の押し殺した笑い声だつた。今回は、伊織が陽菜に一本取られたようだ。彼女が言ったとおり、彩人が男子だと予め聞かされていたにも関わらず、ボーッと見とれていた自分が情けない。

伊織がそんなことを考えている内に、史波に連れられた彩人が伊織たちの元にやつて来る。彩人はまず陽菜の方を見て笑顔をこぼし、次に伊織を見て少柔らかい笑顔をそのままペコリとお辞儀をした。

「キミが、史波さんの言つていた天城くんだね」

「ああ、君がさつき2人と一緒にいた……」

「うん！ 南御寺彩人だよ。男同士なんだし、普通に下の名前で彩人つて呼んでもれればいいから」

見た目だけで言えば明らかに少女の彩人にそう言われても、困るだけだ。第一

「男同士なんだし」というその声からして男性特有の擦れや太さがまるで無い。おそらく声変わり前とか後とか、そういうレベルの問題ではないだろう。目を閉じて聞けば、多分10人が10人、100人が100人アルトソプラノの少女の声だと思うに違いない、そんな美声であつた。

だが、いつまでも照れているわけにはいかない。自分がここに来

たのは、断じて

目の保養のためなんかじゃない。そう気を取り直した伊織は、軽く表情を引き締めてから彩人の方に向き直った。

「じゃあ、彩人。俺の事も下の名前で伊織って呼んで良いから

「うん。ボク、この学校で同じ男子ときたらと話したのは初めてだよ。

よろしくね、伊織くん」

そう言つて微笑む彩人の笑顔に、普通の男子ならばまた数秒ほど思考回路を停止させていたであつた。その点、伊織の脳内は並よりも優秀であった。彩人の美しさは一瞬頭の片隅において、改めて本題に入る。

「それで、今呼んでもらった理由なんだけどさ、今日の・・・・・・

」

「伊織くん」

言いかけた伊織を、彩人は微笑したまま静止した。

「大体のお話は、史波ちゃんから聞いたよ。購買の券をくれるって話だよね」

「あつ、もう聞いてたんだ。だつたら話は早いな」

そういうつてポケットから用意していた購買の券を取り出そうとする

る伊織に、

再び「伊織くん」という美声がかけられた。

「ボクも、高宮さんや周防さんと同じだよ。購買の券なら伊織くんが使って。別に僕が

何かしてあげられた訳でもないし、貰つても申し訳ないから」

「じゃあ、せめて他の・・・」

「それも良いよ。それに、伊織くんはこの学園で初めてできた同じ男友達だから、

それだけで十分」

彩人の意外な押しの強さに、伊織は言はずだつた言葉を言えなくなってしまった。

先ほどの陽菜や史波とのやり取りの後、今度は何とか券を受け取つてもらおうと、いくつか口実も考えていたはずだ。

そうした言葉の代わりに、伊織の口をついて出たのは

「分かった。じゃあ今は、そのお言葉に甘えておくよ」

結局、大した事も言えぬままに向こうの発言を受け入れていたのだ。

当ての外れた伊織とは対照的に、彩人は心の底から嬉しそうにする。

「わあ、ありがとう！ クラスは違うけど、伊織くんが初めての

お友達だから、

これからもよろしくね！」

そう言つて彩人は天使のような笑顔を向ける。この表情は反則だ。先ほど十分に

反省したにも関わらず、伊織は再び彩人の魅力に負け、しばしその笑顔に魅入る。

いや、伊織だけではなかつた。周囲にいた数名の男子生徒ほぼ全員が、その表情をほんやりと見つめはじめた。

「なるほど、それで旦那は男を相手にしばし見とれていたと、そういう訳ですか」

「まあ否定はしないが、正直あれは反則だ。佑も、会つてみれば分かる」

「ほうほう、旦那がそこまで言つんだったら、今度会つてみたいですねえ」

太陽がいよいよ本格的に西の空へと落ち始めた時間帯。あの後陽菜たち3人と分かれた伊織は佑と合流し、校舎から帰宅するところであった。

と言つても、他の多数の生徒と同じく、伊織と佑もこの学園で寮生活をしている。

ゆえに帰宅、といつても学生寮にある自分の部屋に戻る、というだけであるのだが。

「それにしても」

白衣の右ポケットに手を突っ込み、モソモソと動かしながら、佑は伊織に切り出した。

「少しあつい事になりましたねえ。今日の抜き打ち試験のせいでの、オイラと旦那の顔が、大分広まっちゃいましたから」

「やつかいな」と言つ割には、相変わらず飘々とした口調だ。

「そつか？俺たちとやつたは20人くらいのものだつただろ？」

「ええ、でも旦那、人の噂は、恐ろしいものですよ」

佑の口調が突然変わり、一段と真剣なものになった。ポケットの中で動かしていた手も止めて、佑は淡々と、しかし真剣な口調で語り続ける。

「確かに旦那とオイラが直接やりあつたのは、せいぜい17・8人です。ですが本当の問題は、その17・8人が、知り合いでオイラや旦那の事を言いふらしちまつ事なんですよ。

正直言つて、旦那の実力だけでも話のタネに十分な上、オイラの

そう言つと、佑は伊織の方に向き直り、一瞬その眼を見開く。伊織の目の前で、佑の黒い瞳が、白濁した青色に変わり、そしてまた黒に戻った。

「この眼があります。これじゃ、話題にならない方が不思議ですよ

佑は再び田線を目の前に戻し、表情1つ変えずに話続ける。

「まあ、この学園じゃ、我々以外にも珍しい魔法を持つてるのが口ごロ口ごロしてます
からねえ。オイラはともかく、旦那がそこまで目立つとは思いませんが」

おじけた口調の佑であったが、その眼には明らかに不安があつた。
それを察して、

伊織は声に力を込める。

「その時は断るわ。それで馬鹿にされるなら、安いもんだ」

「大会はどうします?」この学校では、年に2回、生徒同士の魔法模擬戦の大会があるんですね

「それだつて、適当に途中で負ければ良いだろ?」大会に勝つた

からつて、せいぜい

周りから褒められるくらいだからな。そんなものはいらなこせ

佑の質問に、伊織は全てはっきりと答えた。その気持ちを察せない佑ではない。

ホツと息を吐いたその表情には、もう不安の影は無かつた。

「なるほど。まあ、確かにこいらぬ心配でしたか。こいつの学園で生徒同士の戦闘じつけんじがしそつちゅうつて言つても、避けようとするれば、こいつでも避けられますからね」

表情を再び穏やかにした佑は、今度はポケットに突っ込んでいた手を抜き出し、なにやら透明な液体の入った細いコルク付き試験管のようなものを取り出して、クルクルと回し始めた。

その様子に、今度は伊織の方が「そういうえー」と声をかけた。

「ここの間、入学試験の成績を受け取りに行つたんだよな?」

「ええ、別に興味も無かつたんですが、くれるつて言つから貰つてきましたよ」

試験管が佑の手を離れ、空中でクルクルと2度3度回つた後、再び手元へと帰る。

「その結果、聞いても良いか？」

「ああ、別に大したことじゃないですよ」

軽く笑つて受け流した佑は、少し思い出すようなそぶりを見せてから、サラリと言った。

「実技が8位、筆記が3位。まあ入学試験ですから、合格すれば良いと思いましてね」

それを聞いて、伊織はウーン、と感心する。この学校の生徒は20名だが、入学を希望し試験を受けたのはその倍以上、500名を超えていた。その中で実技が8位、筆記が3位。この場にいたのが佑を良く知る伊織以外の生徒なら、多分その場でしばし呆然としていた事だらう。

もつとも、佑を良く知る伊織にとっては、それは当たり前だったのだが。

「佑

そして伊織は、自分の良く知る親友の実力から、1つの推測を導いていた。

「筆記はともかく、実技試験は全力の何割で受けたんだ？」

その質問に、佑はククッと押し殺したような笑いを見せる。再び、

試験管が
宙を舞つた。

「フフツ、いえ、旦那は誤魔化せないですねえ。一応この眼も使つたんですよ。

別に、手を抜いたといつ訳ではないんですから。ただ・・・・・・

「

少しもつたひぶつてから、佑は小さく口を開いた。

「眼の力は、2割も出しませんでしたよ。それ以上は、少し疲れてしまうんですね」

所々が風の音にかき消されるほど、小さな声だったが、伊織には十分聞こえていた。

「さすがだな、佑。実技が150番台だった俺が、こうして一緒に歩いてるのは
不思議だな」

「いえいえ、それより、この事は他の方には言わないでいただけますと助かります。

オイラも、『ゴタ』タには巻き込まれたくないんでね

「分かった。言いふらすような事はしないぞ」

「へへっ、ビツモ

会話は途切れ、2人は桜並木に挟まれた道を歩く。何気ない会話の後の、

何気ない帰宅風景。

だが、佑の心の中は大きく変わっていた。

先ほどの何気ない言葉。伊織は、「実技が150番台だった」と、確かにそう言つていた。

だが、親友の佑には分かる。伊織が本来の実力を出せば、実技の点数が1位となるどころか、学園の入試成績に早くも金字塔を打ち立てていたに違いない。

にも関わらず、150番台だった、と言つ事は、考えられる可能性は一つ。

実技試験の1つに、試験監督に向かつて自分の得意とする魔法を放つ、というものがあった。伊織はおそらく、この試験を「辞退した」に違いない。

先ほどの試験での伊織の行動も、それを証明していた。伊織は、自分の中の傷を、まだ克服していなかつたのである。

「他人に向けて魔法を使えない」という、大きな過去の傷を。

佑の手からは、先ほどまでも遊んでいた試験管が消えていた。その手は、ギリギリと力を込めて握り締められている。

(旦那、いつか必ず、旦那の傷を治して見せます。旦那の魔法は、使われないまま終わって

良いよつな物のじやないですか（うら）

第8話 試験後のひと時（2）（後書き）

作者の治部醤油です。

まず読者の皆さまに、謝罪しなければならないことが2つあります。

一つは、1週間後と予告しておつしました更新が、大幅に遅れましたことです。

小説を期待して頂いた皆さまに大変な迷惑をおかけいたしました事、心よりお詫び申し上げます。

もう一つは、小説のタイトル変更です。小説の展開変更に合わせ、前回第7話のタイトルを変更させていただきました（内容は全てそのままです）

自分の構成力不足を、反省しております。

作品の内容に関するお話は、明日掲載予定の第9話後書きにて、また触れる予定です。この度は、誠に申し訳ござりませんでした。

幕間 暗い部屋の中で

部屋の中は、薄く黄色がかつた光で包まれている。部屋の天井に吊るされたいくつかの間接照明が天井を照らし、その明かりが部屋中に行き渡つて、窓が一つも無いこの部屋に十分な明かりを生み出していた。

大きな部屋だ。幅や奥行きはもちろん、特に天井の高さが目立つ。悠に6メートルはあるつかと言つての高さは、どいか廠かな雰囲気を演出している。

部屋の大きさに反し、その中身は至極シンプルだった。真ん中に置かれた、大きな円卓。その周囲には、お互いに2メートルほどの間隔を置き、10個の肘掛けイスが綺麗に配置されている。

それ以外に部屋にあるものと言えば、部屋の片隅に置かれた無線やモニターの付いた大きな機械。その反対側の隅にある小さなテーブルの上には、金属製のバケツのような容器の中でシャンパンのビンとグラスが氷水に浸かっている。そして、部屋の4面、それぞれに一つずつ配置された扉。扉の内で向かい合つた1対の方は木製で、金のメッキを施した重厚なものであつたが、もう1対は合板の扉にステンレスのドアノブ、

とこう至つて簡素なものである。

部屋には、2人の人影が見えた。1人はセミロングの黒髪に、同じく黒いスーツ、メガネをかけた、まだ若い女の姿。円卓を囲む座席の1つに座り、なにやら書類の

分厚い束に目を通している。

「…………そうだ。計画は実行して構わん」

そして、この声の主がこの部屋にいるもう一人、スミレ色のマントを身につけ、髪はオールバック。30代か40代の男であった。彼は部屋の脇、大きな機械の前に立ち、それを通して誰かと言葉を交わしている。普通に話しているだけなのに、その声は、どこか恐怖を煽り立てる。

「心配するな。最初の打ち合わせどおり、こちらからは補助部隊を出す。お前たちの計画が上手くいくように、協力させよう。それにお前たちが加われば、問題あるまい?」

「しかし、神堂 じんどう 様、今回の件は学園の近くで行なうものです。たがが学生2人が相手とはいえ、やはり万全を期すべきかと思われます。もちろん、我々のみでも十分に

可能ではありますが、本件の相手は……」

「もう良い

口を動かしたかさえ分からぬほど、独り言のような小声。それでも、そこに込められた静からいら立ちと殺氣は、通信機の向いの粗手を黙らせるに十分過ぎるものだつた。

「回りくどい言い方は止めてくれないか? つまり、どうこう事が言いたいのか、端的に説明してくれるとありがたいんだがね」

声の調子の変化に、通信機の向いでは明らかに動搖が広がつた。神堂の問いかけの後、数秒ほど「い、いえつ、その」と言ひ無意味などもつを経て、おずおずとした声が聞こえてくる。

「は、はつ、その、率直に申し上げますと、いま少し、お力添えを賜れば、これほどありがたい事は……」

「聞こえなかつたのか?」

今度は、はつきりと聞こえる音量だつた。その声は更に冷たさを増している。

「はつ! ? も、そもそも聞こえな、かつた、とは、何のじじで?」

「回りくどい言い方は止めないと言つた。具体的に、何を寄こせと聞いたいんだ?」

「はつ、つ、つまり神堂様か、他の幹部の方々にき、来ていただきまして、計画の指揮を取つて、いただければ、そ、その、今回の件につきましては、非常に、大変に効率よく、解決するのではないかと、愚考いたしまして・・・・・」

まるで全身に刃物を突き立てられ、無理やり喋らされているかのような哀れな

申し出に、男は、答える代わりに

「アツハツハツハツハ！　いや、俺が来い、か。フフツ、ハハツハツハツハツ！」

思わず吹き出した。あまりの事に呆然としているのか、無線からの声も無い。

会話を再開したのは、笑いを落ち着けた男の方であつた。

「ハハツ、いや悪かつた。君達の申し出があまりにも面白かつたのでね、笑わずにはいられなかつたのだよ」

「はつ、そ、その、面白い、とは？」

男の言葉に、無線の向こうからは訳が分からぬ、といった様子の声が応じた。

その声に苛立つてきた男は、しかし楽しげな口調のままで応じる。

「面白いと思わないのか？ 自分達の勝手で作戦を持つてきて、自分達だけでは

学生2人でも持て余すだらうから、補助部隊を寄こせと言つてきただかと思えば、

今度は幹部の誰かに来て欲しい、のだりつゝ、いやいや、身の程知らずもここまで

来ると、笑いが止まらないな」

そう言つて、またハハツと笑い出す。その雰囲気に異常なものを感じ取つたのか、

通信機のマイクから、まるで叫ぶよ

「もつ、申し訳ございませんっ！ 我々だけで、我々だけで何とかいたしますので、

そ、その、先ほどの援軍だけを頂ければ、後は我々が・・・・・・

」

懇願にも似た、追い詰められた声がまくし立てた。男は笑いを落ち着かせると、

少し落ち着かせた口調で言い放つ。

「そつか、では、約束どおり援軍をやろつ。幸運を祈るぞ」

短く、何の思いやりも感じない応答であつたが、無線機の向こうからは神の啓示でも賜つたかのように、歓喜の声が響いてきた。

「は、はいっ！ それでは、また、作戦が終わりましたら、じひつ、ご連絡を」

最後まで呂律が戻らぬまま、プリン、といづ面と共に通信機からの声は途絶えた。

男は冷たい笑顔を絶やさぬまま通信機の前を離れ、部屋の反対側に向かった。

「今、南御寺の落ちこぼれさん達から？」

円卓の椅子に座っていた女が、書類から目を離して男に問い合わせる。

「ああ、いやはや全く持つて、あいつらの馬鹿を加減は笑わせてくれる」

そう言いながら、男はテーブルの上で冷やされたシャンパンを取り、側に置いてあつた栓抜きをキュックキュックとコルク栓に捻じ込んで、そのまま栓を引き抜いた。スポン、

という気持ちの良い音と共に、瓶の口からは少量の白い煙が流れ出る。シャンパンがよく冷えた証拠だ。

「もしあんな連中が通用するのなら、南御寺も終わりだよ。その点、今の当主はやはり賢い。

あんな連中はいちいち機嫌をとつて仲間にしてもくつよつ、適当に妬ませて敵にしておいた方がよほどマシだからな」

そう言いながら、男はシャンパンの浮いていた容器からグラスを2つ取り出し、タオルで軽く拭つた後、それぞれにシャンパンを注ぎ入れた。淡い琥珀色の液体が、グラスの中でシュワシュワと発泡している。

「でも、それならどうして協力するのかしら。そういう無駄な事は、お嫌いじゃなくつて？」

読み終えた書類をテーブルで揃えた女は、神堂の方へと田線を向けながら語りかかる。

「まあ、今回は場所が場所なのでね、少し賭けをしてみようかと思つたのだよ」

神堂はグラスの一つを女に差し出した。女は「ありがとう」と軽く応じ、シャンパンを軽く口に含んでから再び尋ねる。

「それで、その賭けっていうのは？」

同じくグラスを傾けていた男は、女の質問に笑みをこぼした。

「いや、大した事じゃないんだ。ひょっとしたら空振りに終わるかもしれないのだがね。

ただ何となく、上手くいく気がするんだ」

「そりゃ、気がする、なんて、論理的な貴方らしくないんじゃない？」

「まあ、しかしこれ位しか機会がないのでね。貴重なチャンスは有效地に活用しておくれまでだ」

そう言つて、男は再びシャンパンを口に運ぶ。その表情は、実に嬉しそうな笑みを浮かべていた。どう見ても、今口にしているシャンパンが美味しい、といった表情ではない。もつとどす黒い、人間として異常な感覚から生まれた笑顔だ。

「それで、何を期待しているのかしら？」

女も女で、そいつた男の不気味さに表情一つ変えず、楽しげな表情のままで会話を続ける。普通の人間が見れば異様な会話が、この部屋では当然のように繰り返し続けられていた。

「そんなに聞きたいか？」

「ええ、聞かせてくれるものなら、ぜひ」

その質問に、男はしばし答えなかつた。その代わり部屋の隅にあるテーブルに戻り、再びシャンパンをグラスに満たしてから、女の3つ隣の席に座る。

「あの学園には、伊織がいる」

泡立つシャンパンを眺めながら、男はゆっくりと口を開いた。

「あいつとはもう2年以上会つていないんでね。どれだけ成長した

が、見ておきたいんだよ。

一応、私の息子といつことでもあるからな

男の笑顔に、また新しい感情が加わった。傷つき、悶え苦しんでいる獲物を前にした

肉食獣を思わせる、どこまでも邪悪な感情。そんな感情の変化に気付いたのか、女は

確かめるように、「神堂、あなた」と切り出した。

「伊織くんの力を見るために、彼らにあの計画をさせつもり?」

「別に構わないだろ?」南御寺のクズどもに、それ以上の期待は酷というものだ

そう言つて、男は再び含み笑いを見せた。通信機に向かつた時の侮蔑に満ちた笑いとも、先ほどまでの凍りつくよつに邪悪な笑いとも違う、心の底からの期待と喜びから生まれた、純粋な笑い。

「伊織、舞台は用意しよう。2年間鍛えたお前の力、見せてもらつぞ

そう呟くと、男はグラスを口に運び、残りのシャンパンを一気に飲み干した。

幕間 暗い部屋の中で（後書き）

お読みいただいた皆さん、ありがとうございます。作者の治部醤油です。

今回は何とか予告通りの更新ができ、ホッと一安心、といった所でしょうか。今回あまり本筋とは関係の無い、完全な伏線回となつてしましましたが、いかがでしたでしょうか？

さて、ここでは前回お約束したストーリー関連のお話を少しせせていただきます。これから作品では、学園生活が本格的に始まります。いよいよ、伊織たちが今回の「事件」に、巻き込まれていくわけです。

もちろん新キャラクターも予定しております。ただ、主人公達と同年代の新キャラクターは、あと2人くらいで収める予定です。それ以上は、書き分けが難しくなってきますので・・・・

次回更新は、また1週間以上後になる予定です。相変わらずの遅筆ですが、気長にお待ち頂ければ幸いと思います。

ご意見、ご感想ありましたら、気軽にお寄せください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2278e/>

太陽は堕天使を照らして

2010年10月11日19時27分発行